



Title	ドイツ語から見たゲルマン語(2) : 属格と所有表現
Author(s)	清水, 誠
Citation	北海道大学文学研究院紀要, 160, 37(左)-96(左)
Issue Date	2020-03-31
DOI	10.14943/bfhhs.160.137
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/78849">http://hdl.handle.net/2115/78849</a>
Type	bulletin (article)
File Information	160_07_Shimizu.pdf



[Instructions for use](#)

## ドイツ語から見たゲルマン語 (2)

— 属格と所有表現 —

清 水 誠

German as a Germanic Language (2)

— Genitive and Attributive Possession —

(*Bulletin of the Faculty of Humanities and Human Sciences* No. 160.

Faculty of Humanities and Human Sciences, Hokkaido University.

Sapporo/Japan. 2020. ISSN 2434-9771)

SHIMIZU, Makoto

(mshimizu@let.hokudai.ac.jp)

### 1. 現代ゲルマン諸語の属格の衰退と格組織<sup>1</sup>

屈折語尾による格の中で、現代ゲルマン諸語の間で最も衰退が著しいのが属格である。名詞句を修飾する連体格としての属格修飾語 (ド Genitiv-attribut)<sup>2</sup> と、動詞・形容詞・前置詞を含む語彙的主要部の補語 (complement)

---

<sup>1</sup> 本研究は清水 (2019b) の続編であり、科研費の助成による (ゲルマン語類型論から見たドイツ語の新しい構造記述, 基盤研究 (C) (一般), 19K00540)。

<sup>2</sup> カッコ内の用語は原則として英語名による。用例などで使用する言語名の略語は次のとおり。ア: アイスランド語, ア7: アフリカーンス語, イ: イディッシュ語, 英: 英語, オ: オランダ語, ゴ: ゴート語, 古高ド: 古高ドイツ語, 古ザ: 古ザクセン語, ス: スウェーデン語, フ: スイスドイツ語チューリヒ方言, 中英: 中英語, 中期オ: 中期オランダ語, デ: デンマーク語, ド: ドイツ語, 西7: 西フリジア語, ニ: ノルウェー語ニューノシユク, ブ: ノルウェー語ブークモール, フ: フェーロー語, フ7: 北フリジア語フェ

としてはたらく属格目的語（*D Genitivobjekt*）をとともにある程度、保っているのは、アイスランド語とドイツ語に限られる。ドイツ語諸方言の大多数でも、属格は失われている。アイスランド語に比べて、ドイツ語の属格目的語には制限が強い（第2節）。属格修飾語についても、ドイツ語の「無冠詞固有名詞・親族名称+*-s*」の*-s*は前接語（*enclitic*）に変わっている（第5節）。

人称代名詞以外で屈折範疇としての格変化を残すゲルマン語では、一般に最初に衰退し、消滅する格が属格である。たとえば、フェーロー語の属格は、主・対・与・属格の4つの格の中で慣用句や固定表現に用法が限られ、話し言葉ではほとんど用いない（第15節）。イディッシュ語の属格は複数で衰退しており、単数では「与格+前接語*-s*」の折衷形式を取る（第7節（32））。この*-s*は屈折語尾による属格ではなく、与格名詞句への前接語である。また、フェーロー語もイディッシュ語も属格は動詞・形容詞の目的語には用いない。さらにフェーロー語のかつての属格支配の前置詞は、対格支配に大幅に移行しており（第8節（33））、イディッシュ語の前置詞はすべて与格支配である。

言語地理学的に西中部ドイツ語圏に位置づけられるルクセンブルク語でも、人称代名詞を除いて、主格と対格が共通格（*common case*）に融合して、与格と対立し、属格は慣用句や古風な固定表現に限られている<sup>3</sup>。同じく中部ドイツ語方言圏のプファルツ地方（*D Pfalz*）をおもな源郷とするペンシルヴェニアドイツ語も、属格が消失した点以外はルクセンブルク語と同様である。属格が消失したドイツ語方言には、上部ドイツ語に属するスイスドイツ語チューリヒ方言やベルン方言、それにバイエルン方言も含まれる。形態的簡素化が進行した大陸北ゲルマン語の中で、例外的に広く古形を保つスウェーデン語エルヴダーレン方言（*ス älvdalska*）でも、主・対・与格に対して、属格は人称代名詞を含めて残っていない（Åkerberg 2012: 125ff, 216ff.）。

英語、オランダ語、アフリカーンス語、フリジア語群、大陸北ゲルマン語

---

リング方言、ラ：ラテン語、ロ：ロシア語

<sup>3</sup> Schanen/Zimmer (2012: 64)などを参照。ただし、Döhmer (2018)のコーパス調査によれば、ルクセンブルク語の属格は部分の属格（*partitive genitive*）の用法では一般的で、少数の動詞・形容詞の目的語にも用いる傾向があるという。

の4言語(スウェーデン語, デンマーク語, ノルウェー語ブークモールとニューノシュク), それに低地ドイツ語では, 屈折語尾による格変化としての属格は失われている。いわゆる所有格 -s/-s は, 名詞句全体に付加される前接語に変わっている(第4, 6, 9節)。西低地ドイツ語に属する北低地ザクセン方言や東低地ドイツ語に属するメクレンブルク・フォアポマーン方言は, 主格と目的格を区別するが, 段落の冒頭に挙げた他の言語は屈折範疇としての格変化をすべて失い, 統一格(ド Einheitskasus) に変わっている。

(1) 現代ゲルマン諸語の格組織

- ① 主格—対格—与格—属格: アイスランド語, ドイツ語 (=標準ドイツ語)<sup>4</sup> (アイスランド語に比べてドイツ語の属格目的語には制限が強く, ドイツ語の「無冠詞固有名詞・親族名称 + -s」の -s は前接語である)
- ② 主格—対格—与格: フェーロー語 (人称代名詞は主・対・与・属格を区別), イディッシュ語 (属格は「与格 + 前接語 -s」で代用), スウェーデン語エルヴダーレン方言 (人称代名詞も主・対・与格)
- ③ 共通格 (主格 = 対格) —与格: ルクセンブルク語 (人称代名詞は主格と対格を区別, 属格はほとんど衰退), ベンシルヴェニアドイツ語 (人称代名詞は主格と対格を区別)
- ④ 主格—目的格 (対・与格): 西低地ドイツ語・北低地ザクセン方言, 東低地ドイツ語・メクレンブルク・フォアポマーン方言
- ⑤ 統一格: 英語, オランダ語, フリジア語群 (=西フリジア語, 北フリジア語諸方言, ザーターフリジア語), アフリカーンス語, 大陸北ゲルマン語 (=スウェーデン語, デンマーク語, ノルウェー語ブークモール, ノルウェー語ニューノシュク) (人称代名詞は主格と目的格を区別)

---

<sup>4</sup> スイス最南部の最高部アレマン方言(ド Höchstalemannisch)に属する上部ドイツ語ヴァリス方言(ド Walserisch/Walliserdeutsch)には属格が残っているとされるが, 筆者には詳細が未詳であり, 以下の論述では考慮外とする。

## 2. ドイツ語とアイスランド語の属格目的語

ドイツ語では、歴史的に属格目的語が対格、続いて前置詞句に大幅に移行した<sup>5</sup>。現代ドイツ語では、属格支配の動詞は19世紀末の約160語（Blatz 1896<sup>3</sup>: 389-402）から、20世紀後半には官庁・裁判用語（ド *Amts- und Gerichtssprache*）に特徴的な書き言葉で用いる約40語（Kolvenbach 1973: 123）～約50語（Eisenberg 2013<sup>4</sup>: 296f.）に減少した。とくに話し言葉では、ほとんど登場しない。属格目的語と対格・前置詞句目的語がともに可能な動詞もあるが<sup>6</sup>、話し言葉では後者が好まれ、属格目的語は古風な印象を与える。

- (2) ド Diese Behauptung *entbehrt {jeder Grundlage/jede Grundlage}*.  
この主張はどんな根拠も（属格/対格）欠いている（*entbehren* 〈属格：古風〉/〈対格：話し言葉〉を欠く）（Kolvenbach 1973: 128）  
*Sie klagte ihn {des Diebstahls/wegen des Diebstahls} an*. 彼女は彼を窃盗のかどで（属格/前置詞句）告発した（*anklagen* 〈対格〉を〈属格：古風〉/〈wegen + 属格：話し言葉〉のかどで告発する）  
(ib. 128 変更)

ドイツ語の属格目的語を含む述語の結合価には、「主格 + 属格 + {動詞・形容詞}」の2価述語（ド *bedürfen/gedenken/geständig sein* 〈主格〉が〈属格〉を必要とする/思い出す/白状した）のほかに、「主格 + 対格 + 属格 + 動詞」の3価述語（ド *berauben/bezichtigen/überführen* 〈主格〉が〈対格〉から〈属格〉を奪う/〈対格〉に〈属格〉{をとがめる/の罪を確定させる}）がある<sup>6</sup>。前

<sup>5</sup> 属格目的語の対格目的語への移行は、前置詞句目的語への移行よりもかなり早い時期にさかのぼるとされている（Abraham 2013<sup>3</sup>: 206）

<sup>6</sup> 「主格 + *sich*- 対格 + 属格 + 動詞」（*sich schämen/sich rühmen/sich vergewissern* 〈主格〉が〈属格〉を恥じる/自慢する/確認する）は3価述語のように見えるが、〈*sich*- 対格〉の *sich* は固有の意味役割を持たず、本来的な再帰動詞を形成している。

者の2価述語は、第5節で述べる「属格規則」に従って属格標識という形態的補強を必要とする点で、有標性が高い(ド Er bedarf {*\*Ø/der*} Ruhe. 彼は休息を必要としている ↔ Er braucht *Ø* Ruhe. 同左 (brauchen 〈対格〉を必要とする))。後者の3価述語の属格は、文末(右枠)の動詞と隣接する本来の位置から「かきませ」(scrambling) ((3)①)や否定辞 nicht (英 not) ((3)②)で分離すると、不自然になる。通常の「主格+与格+対格+動詞」(ド geben/schenken/zeigen 〈与格〉に〈対格〉を与える/贈る/見せる)のタイプでは問題ない。属格目的語は特定の動詞に固有であるだけでなく、語順でも動詞に強く依存する周辺的な目的語なのである。

- (3) ド ① Sie sagt, dass Johann {*den Freund der Lüge*/*\*<sup>/?</sup> der Lüge, den Freund* \_\_\_} bezichtigte. ヨハンは友人に (den Freund 対格) 嘘を (der Lüge 属格) とがめたと彼女は言っている  
(Philippi 1997: 77 変更)  
↔ Sie sagt, dass Johann {*dem Freund das Foto/das Foto, dem Freund* \_\_\_} gezeigt hat. ヨハンは友人に (dem Freund 与格) 写真を (das Foto 対格) 見せたと彼女は言っている
- ② Sie haben {*den Angeklagten nicht des Mordes*/*den Angeklagten des Mordes nicht*} überführt. 彼らは被告に (den Angeklagten 対格) 殺人 (des Mordes 属格) の罪を確定させなかった  
(Wegener 1991: 96)  
↔ Sie hat {*dem Jungen nicht das Buch/dem Jungen das Buch nicht*} gegeben. 彼女は男の子に (dem Jungen 与格) 本を (das Buch 対格) あげなかった (Wegener 1991: 96)

ドイツ語の動詞・形容詞の属格目的語が衰退傾向にあることは、疑いない。属格支配のなごりは、たとえば vergessen 「〈対格〉を忘れる」に対する Vergiss*meinn*icht 「忘れな草」(私を (-mein ← meiner, ich の属格) 忘れないで))に見られる。Ich bin {*es/des Lebens*} müde. 「私は {それに (対格)/人生

に〈属格〉飽きた」での対格・属格目的語の併存は、対格 es「それ」がかつての属格（<中高ド es↔対格 ez）と混交した結果であり、形容詞 müde「～に疲れた」は古くは属格支配だった。同じく形容詞 froh「|〈über + 対格〉/〈属格〉を喜んで」、fähig「|〈zu + 与格〉/〈属格〉の能力・資格がある」でも、属格目的語は話し言葉では用いず、辞書では「雅語」などと注記されている。Ich bitte dich nur **dies**.「私は君にこれだけを頼む」（Goethe, Paul 2002<sup>10</sup>: 174）の dies「これ」（= dieses）も、bitten が「〈対格〉に〈um + 対格〉を頼む」に変わる以前の結合価「〈属格〉に〈中高ド umbe + 対格〉を頼む」を反映した「属格（中高ド dises↔対格 disez）>対格（dies/dieses）」という再分析に由来する。前置詞目的語としての属格も同様であり、たとえば zweifelsohne「疑い（Zweifel の属格 -s）なく」は、名詞句に後続する場合の前置詞 ohne「〈対格〉なしに」が古くは属格を支配した証拠である<sup>7</sup>。

属格目的語の用法をかなり保っている唯一の現代ゲルマン語が、アイスランド語である。前置詞目的語については、ドイツ語で与格支配と競合する属格支配の wegen「～ゆえに」にあたる vegna など以外に、対格支配に移行した ohne「～なしに」に相当する án「～なしに」も属格支配である。属格支配の動詞もなお豊富で、他の格支配へ移る傾向はあるものの（Jónsson 2017）、共通の意味特徴が認められる。願望（óska ～を望む）、欲求（girnast ～を欲する）、祈願（biðja ～を頼む・祈る）、追求（leita ～を求める）、注意（gæta ～に注意する）、想起（sakna ～の不在を寂しく思う）の心理的意味、それに拒絶（varna ～を拒む）、損失（missa ～を失う）、利害（njóta ～を享受する）の意味がそれである（Kress 1982: 212f., 220f.）。前者は主語の内部にこもる動作、後者は離脱の意味が基本で、目的語に直接的影響を与える「割る、殺す」などの典型的な他動詞からは縁遠いグループである。属格支配の形容詞も、verða var「～に気づく」（verða ～になる、ド werden）、vera minnugur

<sup>7</sup> 前置詞 ohne（中高ド äne <古高ド äno）の使用は、古高ドイツ語期には「属格～äno」/「äno + 対格」が一般的だった。新高ドイツ語期には与格支配の mit の影響を受けてか、与格支配の例も散見される（Paul 1968 (1920): 32, Paul 2002<sup>10</sup>: 722）。参照：ド ohnedem（古）/ohnedies「そうでなくても、いずれにせよ」（= ohnehin）。

「～を覚えている」(vera～である, ド sein), vera letjandi 「～を勧めない」などがある。ドイツ語の wünschen 「〈与格〉に〈対格〉を望む」(ア óska), 上述の bitten 「〈対格〉に〈um + 対格〉を頼む」(ア biðja), missen 「〈対格〉を欠く」(ア missa), genießen 「〈対格〉を享受する」(ア njóta) も古くは属格支配だった。gewahr werden 「〈属格〉に気づく」(ア verða var) は今でもそうである。アイスランド語の óska 「〈与格〉に〈属格〉を望む」に対して, 3 価述語は対格目的語を含むという制約があるドイツ語では, wünschen 「〈与格〉に〈対格〉を望む」は属格支配から対格支配に変わっている。

古ゲルマン諸語の中で, ゴート語はロシア語と同じく否定文で属格目的語を多用した (Streitberg 1920<sup>5/6</sup>: 177f.)。他動詞表現での否定は, 動作の影響が目的語に及ばないことを含意する。動作の影響が部分的にとどまることを表す部分格 (partitive) が想定できるとしたら (Dal/Eroms 2016<sup>4</sup>: 19), ゲルマン諸語の属格目的語はこの意味役割を弱めてきたと言えよう。ドイツ語では新高ドイツ語期にも, 部分の属格 (partitive genitive) の用法が目的語 ((4) ①) および非対格動詞の主語 ((4) ②) に認められる。ともに現在では古風な表現になっている。

(4) ド ① Das Pferd trank **des Wassers**. 馬は水 (= 若干量の水, des Wassers 属格, 現在は対格 Wasser) を飲んだ

(橋本 2006 (1956) : 614) 変更)

Sorgsam brachte die Mutter **des klaren, herrlichen Weines**. 注意深く母は澄んだ素晴らしいワイン (= 若干量の澄んだ素晴らしいワイン, des klaren, herrlichen Weines 属格, 現在は対格 klaren, herrlichen Wein) を運んで来た (Goethe)

(ib. 614 変更)

② **Seines Gesanges** erschallet noch. 彼の歌は (seines Gesanges 属格, 現在は主格 Sein Gesang) まだ鳴り響いている (Klopstock)

(Dal/Eroms 2014<sup>4</sup>: 20)

Erinnerungen, **deren** uns ja aus jedem Alter bleiben まさに



私たちのどの年代にも共通の (=どの年代の私たちにもとどまっている, deren 関係代名詞・複数属格, 現在は主格 die) 思い出 (Jean Paul) (ib. 20)

### 3. 属格目的語と定性効果

部分格の意味役割と否定文の目的語としての属格の用法は、属格の不定の意味と後述する「定性効果」と関連している。古ゲルマン諸語では、属格目的語を不可算名詞に用いて不定 (indefinite) の意味を表し、定 (definite) の意味を表す対格と対比することがあった。もっと以前は規則的な現象だったと推定されている。ゴート語, 古高ドイツ語, 古ザクセン語の例を挙げる<sup>8</sup>。

(5) ゴ *luas haldīþ awēþi jah **miluks** þis awēþjis ni matjai?* だれが<sup>s</sup> (luas) 羊を (awēþi) 飼っていて (haldīþ) そして (jah) その羊の (þis awēþjis) 乳を (miluks 属格・不定) 飲まない (=食さない) ことがあろうか (ni matjai) (An die Korinther I. IX. 7)

古高ド *Her skancta cehanton Sīnan fianton / **Bitteres līdes**.* 彼は (her) 即座に (cehanton) 彼の敵たちに (sīnan fianton) 苦い飲み物を (bitteres līdes 属格・不定, ド eines bitteren Getranks) 注いだ (skancta) (Ludwigslied 53f.)

古ザ *thar mugun gi ēnan man sehan / an is handun dragan **hluttres uuatares** / ful mid folmun.* そこに (thar) おまえたちは (gi) 1人の男が<sup>s</sup> (ēnan man) 彼の手に (an is handun) 清い水を (hluttres uuatares 属格・不定) 両手にあふれるようにして (ful mid folmun) 運んでいるのが<sup>s</sup> (dragan) 見える (mugun~sehan)

<sup>8</sup> (5) (6) の用例は Philippi (1971: 65) に基づいている。ただし、同論文の引用は語形、英訳、出典の点で正確さを欠いているので、必要な訂正を施し、前後の文を補って示した。また、適宜、長音府「<sup>ˊ</sup>」と母音の識別記号「<sup>˘</sup>」を付した。古ザクセン語の用例は Behaghel/Taeger (Hrsg.) (1996<sup>10</sup>: 21, 162) を典拠としている。

(Heliand 4535-7)

- (6) ゴ jah gaggands gahaftida sik sumamma baúrgjanē jainis gaujis, jah insandida ina haiþjōs seinaižōs haldan **sweina**. そして (jah) (彼は) 歩いて行くと (gaggands), その土地の (jainis gaujis) 住民たちのある 1 人に (sumamma baúrgjanē) すがった (gahaftida sik)。そして (jah) (その住民は) 彼を (ina) [その住民が飼っていた] 豚たちを (sweina 対格 (複数)・定) 見守らせるために (haldan) 彼の野原へ (haiþjōs seinaižōs) 遣わした (insandida)

(Lukas XV. 15)

古高ド Inti dir gibu **sluzzila** himilo riches. そして (inti) おまえに (dir) 天の (himilo) 国の (riches) 鍵を (sluzzila 対格 (複数)・定) (私は) 与える (gibu) (Tatian 90. 3)

古ザ gisāhun thar **mahtigna** / **godes angil** cuman すると (thar) 強大な (mahtigna 対格・定) 神の (godes) 天使が (angil 対格・定) 来るのを (cuman) (彼らは) 見た (gisāhun) (Heliand 394-5)

初期の古ゲルマン諸語では、冠詞が未発達だった。そこで、属格目的語で不定、対格目的語で定の意味を表すことがあったのである。属格と対格の区別が不明確になったのを補うために、定冠詞、ついで不定冠詞が発達したという説もある (Leiss 1994, 2000, Abraham 1997, Philippi 1997)。今では少数派で地味な属格目的語も、古くは大切な役目を担っていたと言える。

定・不定の区別には、語順や形容詞強 (不定)・弱 (定) 変化も利用された (Ferraresi 2014: 44-50)。また、動詞のアスペクトも関係していたとして、Leiss (1994) (2000), Abraham (1997), Philippi (1997) はロシア語との比較から、「定：対格～完了アスペクト (perfective aspect)」↔「不定：属格～未完了アスペクト (imperfective aspect)」の対立に注意を喚起している。

- (7) ロ On **raskolol** drova. 彼は (on) 薪を (drova 対格 (複数)・定) 割った (raskolol 完了アスペクト)

ド Er hat **das Holz** gespalten. 同上 (das Holz 定冠詞 + 名詞 : 対格・定)

(Leiss 1994: 312)

(8) ロ On **kolol** drova. 彼は (on) 薪を (drova 対格 (複数)・不定) 割った (kolol 不完了アスペクト)

ド Er hat **Holz** gespalten. 同上 (Holz 無冠詞 + 名詞 : 対格・不定)

(ib. 312)

動詞句の表す動作は、完了アスペクトによって完結的 (telic)・終結的 (terminative), 未完了アスペクトによって未完結的 (atelic)・継続的 (durative) と解釈される。冠詞を欠くロシア語では、動詞の未完了アスペクトによって目的語が不定, 完了アスペクトによって定であることが示され, アスペクトを欠くドイツ語では、不定冠詞と定冠詞がこの区別を明示している。

また、次のロシア語の例では、完了アスペクトの動詞を用いると、動詞句の表す動作が目的語の格に応じて、「定：対格～完了アスペクト」↔「不定：属格～完了アスペクト」と解釈されることを示している。やはりドイツ語では、定冠詞と不定冠詞の選択がこの区別に対応している。

(9) ロ On prinēs **papirosy**. 彼は (on) 紙巻きタバコを (papirosy 対格 (複数)・定) を持って来た (prinēs 完了アスペクト)

ド Er brachte **die Zigaretten**. 同上 (die Zigaretten 定冠詞 + 名詞 : 対格 (複数)・定) (Leiss 1994: 313)

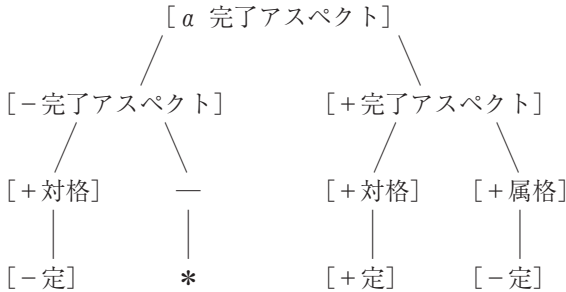
(10) ロ On prinēs **papiros**. 同上 (papiros 属格 (複数)・不定, prinēs 完了アスペクト)

ド Er brachte **Zigaretten**. 同上 (Zigaretten 無冠詞 + 名詞 : 対格 (複数)・不定) (ib. 313)

ドイツ語には文法化された完了・未完了アスペクトはないが、語彙的アスペクト (動作態様, ド Aktionsart) としては, bringen 「持って来る」は完了

アスペクトの動詞と言える。この場合、ドイツ語の定冠詞はロシア語の対格、ドイツ語の不定冠詞はロシア語の属格に対応し、名詞句の定・不定の区別に関与している。冠詞以外に格や動詞のアスペクトによって定・不定の区別が示される現象を「定性効果」(↓ Definitheitseffekt, Leiss 1994: 311; definiteness effect, Weerman/De Wit 1999: 1168) と言う (PERF = 完了アスペクト)。

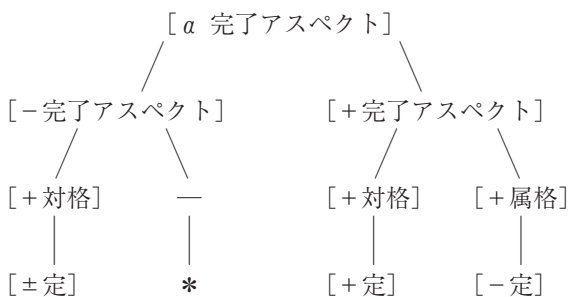
(11) ロシア語のアスペクト・格と定性効果



(Abraham 1997: 44, 46 変更)

(9)(10) のロシア語の例は、(5)(6)に挙げた古ゲルマン諸語の目的語での「対格～定」↔「属格～不定」の使い分けを想起させる。ただし、ロシア語では、不完了アスペクトの動詞の目的語は対格に限られ、属格との対比は見られない。一方、古高ドイツ語でも、「対格～定」↔「属格～不定」による定性効果は、動作の終結を含意する完了アスペクト動詞に主として見られるが、継続を含意する未完了アスペクト動詞では、対格目的語に比べて属格目的語は稀だった。未完了アスペクト動詞には定性効果が期待できず、対格目的語に対して属格目的語を用いる必要性が乏しかったのである。つまり、古高ドイツ語では、定・不定の区別への対格・属格の関与が一部で不明確になりつつあり、これが定冠詞の発達にも呼応したと考えられる。

(12) 古高ドイツ語のアスペクト・格と定性効果



(Abraham 1997: 46 変更)

現代ドイツ語の 40～50 語の属格支配の動詞も、その多数が完了アスペクトに由来する接頭辞動詞であり、不変化詞動詞を合わせれば、全体の大多数を占める (Kolvenbach: 1973, Abraham 1997: 33, 2013<sup>3</sup>: 206)。(13) に示すように、「接頭辞動詞/不変化詞動詞—属格支配」⇔「単純動詞 (ト Simplex-verb) —前置詞句支配」という相補分布的な用例は、現代ドイツ語にもいくつか残っている<sup>9</sup>。類例はドイツ語の古語に数多く散見される。

- (13) ト Sie *gedachten der Gefallenen*. ⇔ Sie *dachten an die Gefallenen*. 彼らは戦没者たちを追悼した (= 思い出した) (gedenken 〈属格〉を思い出す ⇔ denken 〈an + 対格〉を思い出す)

(Kolvenbach 1973: 124)

Er *verwies sie {des Landes/des Zimmers}*. ⇔ Er *wies sie {aus dem Land/aus dem Zimmer}*. 彼は彼女を {国内から/部屋から} 追放した (verweisen 〈対格〉を〈属格〉から追放する ⇔ weisen 〈対格〉を〈aus + 与格〉から追放する) (ib. 126 変更)

<sup>9</sup> ただし、少数ながら、逆に「対格目的語 + 接頭辞動詞」⇔「属格目的語 + 単純動詞」の例もある (ト Er *verwaltet sein Amt*. ⇔ Er *waltet seines Amtes*. 彼は自分の職務を司っている, Kolvenbach 1973: 128)。

これに関連して、(14) では、同一の単純動詞を基本とする接頭辞動詞 (beschuldigen) と不変化詞動詞 (an|schuldigen) が属格目的語を支配している。(15) では、「対格目的語+属格目的語」を伴う接頭辞動詞 (berauben) に対応する単純動詞 (rauben) が、属格目的語 (seiner Ehre) に代わって対格目的語 (seine Ehre) を支配している。そして、構造格である対格の二重使用を避けて、対格目的語 (ihn) が与格目的語 (ihm) と交替し、「与格目的語+対格目的語+動詞」という現代ドイツ語の主要パターンに従っている。

- (14) ド Sie **beschuldigte** ihn *des Verrats*. ↔ Sie **schuldigte** ihn *{des Verrats/wegen Verrats} an*. 彼女は彼に裏切りの罪を着せた (beschuldigen <対格> に <属格> の罪を着せる ↔ anschuldigen <対格> に <属格/wegen+属格> の罪を着せる・で告発する)  
(Kolvenbach 1973: 125 変更)

- (15) ド Sie **beraubte** ihn *seiner Ehre*. ↔ Sie **raubte** ihm *seine Ehre*. 彼女は彼から彼の名誉を奪った (berauben <対格> から <属格> を奪う ↔ rauben <与格> から <対格> を奪う) (ib. 128 変更)

古高ドイツ語の接頭辞動詞は、現代語よりも明確に完了アスペクトの意味を担っており、定の意味を表す対格目的語に対して、属格目的語は不定の意味を表す役割を保っていたと考えられる。中高ドイツ語期までは、属格目的語の使用は増大する (Dal/Eroms 2014<sup>4</sup>: 19)。それは不定冠詞が未発達で、不定の意味を表す手段として属格目的語を用いたためと考えられる (Abraham 2013<sup>3</sup>: 208f.)。一方、ge- を始めとする動詞接頭辞や不変化詞は、完了アスペクトの機能を弱め、目的語の定・不定が不明確になるにつれて、定冠詞が発達を促され、中高ドイツ語期に確立した。不定冠詞はそれより遅れて、初期新高ドイツ語期に確立したとされている。現代ドイツ語では、属格目的語はアスペクトと無関係に少数の語彙に限定された内在格に変わっている。これに対して、古高ドイツ語の属格目的語は、統語的使用条件に依存する構造格の性格をある程度とどめていたと考えられる (Abraham 1997: 49)。

#### 4. 属格修飾語と所有格 -'s/-s

中世以降のゲルマン諸語は、脱屈折化 (deflection) の進行とともに、名詞修飾語としての属格 (属格修飾語) を脱文法化し (第4節～第6節)、再述所有代名詞構文 (ド meinem Vater sein Haus 私の父の家) の文法化との競合を通じて、所有関係を基本とする名詞句間の表現形式を求め続けた (第7節～第13節)。以下ではその過程を検証する。そして、属格に由来する機能的要素の種類と多重使用を検討し、ゲルマン諸語の属格の変遷が言語の発達サイクルとリサイクルの一例であることを示す (第14節～第16節)。

ドイツ語とアイスランド語は、第5節で述べる相違はあるが、属格修飾語も備えている。一方、英語のいわゆる所有格 (possessive) -'s 「～の」に相当する要素 -s は、人称代名詞以外で格変化を完全に失った大陸北ゲルマン語の4言語や、英語、オランダ語、西フリジア語などの西ゲルマン諸語にもある。しかし、これらはドイツ語とアイスランド語の格変化、つまり屈折 (inflection) による属格ではない。第1節で述べたように、人称代名詞以外で格変化を残すゲルマン諸語では、最初に衰退する格が属格である。Janda (1980: 245) によれば、無標の一般格に対して残存するのが屈折範疇の属格である言語は存在しない。英語などのいわゆる所有格 -'s/-s は、類型論的にきわめて例外的な屈折語尾であることになる。以下ではこの点を論じる。

まず、その形態表示について、大陸北ゲルマン語からスウェーデン語を例に取って、アイスランド語と比べてみよう。

- |           |   |           |  |
|-----------|---|-----------|--|
| (16) 単数主格 | ス | hunden    | その犬が (← hund + -en, 英 the dog)         |
|           | ア | hundurinn | 同上 (← hund-ur + -in-n, ド der Hund)     |
| 所有格       | ス | hundens   | その犬の (← hund + -en-s, 英 the dog's)     |
| 属格        | ア | hundsins  | 同上 (← hund-s + -in-s, ド des Hund(e)s)  |
| 複数主格      | ス | hundarna  | その犬たちが (hund-ar + -na, 英 the dogs)     |
|           | ア | hundarnir | 同上 (← hund-ar + -(i)n-ir, ド die Hunde) |

所有格 ス hundarnas その犬たちの (hund-ar+-na-s, 英 the dogs'<sup>10</sup>)  
 属格 ア hundanna 同上 (← hund-a+-(i)nn-a, ド der Hunde)

名詞に定冠詞 (= 後置定冠詞, ア -in/- (i)n-, ス -en/-na) をつけると, アイスランド語では名詞と定冠詞がともに属格に変化するが, スウェーデン語では -s が1度つくだけである。しかも, スウェーデン語の hundens/hundarnas (英 the dog's/the dogs') では, -s は名詞 hund/hundar ではなく, 名詞句 hunden/hundarna 全体の末尾に付加されている。-s が後置定冠詞 -en/-na には後続するが, それ自体に付加されているのではないことは, 不定冠詞 en を伴う en hund(s) (英 a dog's) では, -s が名詞に後続することから明らかである。また, アイスランド語では, 語幹形成接尾群の種類を反映して, 男性名詞に限っても, 属格語尾 (単数/複数) の種類は, -s/-a (hund(s)/hunda ← hundur 犬, a-語幹・強変化), -ar/-a (kattar/katta ← köttur 猫, u-語幹・強変化), -a/-a (hana/hana ← hani 雄鶏, an-語幹・弱変化) などと多彩である。スウェーデン語の -s は, アイスランド語に残る単数属格語尾 -s から発達した性・数<sup>すう</sup>とは無関係の前接語 (enclitic) なのである。

ドイツ語と英語など, 西ゲルマン語相互の関係についても, アイスランド語とスウェーデン語の関係と同様である。ドイツ語の des Hund(e)s では, アイスランド語と同様に, 定冠詞 d- と名詞 Hund- が属格に変化するが, 英語の the dog's の the はそのまま, -s はスウェーデン語と同様に, the dog 全体の末尾に付加されている。英 [the dog]'s name 「[前置定冠詞+名詞]-'s」では -s が名詞 dog につき, ス [hunden]s namn 「[名詞+後置定冠詞]-'s」では -s が定冠詞 -en につくように見えるのは, 語順の違いにすぎない。「A の B」を表す語順の相違, すなわち, 英/ス 「所有格 A-'s/-s+B」↔ ド/ア 「B+属格 A」に注意して, 比較してみよう。

(17) 英 「前置定冠詞+名詞」 / 「所有格 A-'s/-s+B」

<sup>10</sup> the dogs' (← dogs+-'s) ではわかりにくい, the men's からは明らかである。



[the dog]'s name/[the dogs]' names 犬の名前/犬たちの名前

↔ス 「名詞+後置定冠詞」/「所有格 A-'s/-s+B」

[hunden]s namn/[hundarna]s namn 同上

(18) ド 「前置定冠詞+名詞」/「B+属格 A」

der Name [des Hund(e)s]/die Namen [der Hunde] 同上

↔ア 「名詞+後置定冠詞」/「B+属格 A」

nafnið [hundsin]s/nöfnin [hundanna] 同上

そもそも派生接辞と違って、屈折接辞(=語尾)がついた語には別の接辞を付加できない。安井(1996<sup>2</sup>:84f.)は英語について次のように述べている。

(19) 「一般に、屈折接辞(inflexional ending)は、一度、語幹につけると、その語形は『閉じられ』(closed)、それ以上接辞をつけることを許さない。例えば、pay に-ingをつけて paying とすれば、この形は閉じられた形で、これにさらに接辞をつけることはできない。だから、repaying という形があれば、これは paying に re-がついたのではなく、repay に-ing がついたものである。

この原則は、かなり一般的なものであり、派生語を作る派生接辞(derivational suffix)、例えば *unkindness* における un- や -ness と、-ed, -ing, -s などの屈折接辞との区別をする決め手とさえなるものであるが、そのほとんどただ一つの例外をなすのが、所有格語尾-'sであり、girls', men's にみられるように、複数の屈折接辞のあとに付け加えることができる。この点でも、所有格は、きわめて特異なものである」

安井(1996<sup>2</sup>:84f.)

この矛盾は、いわゆる所有格-'sを屈折接辞(=語尾)ではなく、前接語とみなせば解消される。英語以外の同類の-sについても同様である。

これはいわゆる所有格-'s/-sを伴う名詞句に限らず、一部の代名詞にも当てはまる。たとえば、スウェーデン語の3人称非再帰所有代名詞の単数形

*hans* 「彼の (人間)」/*hennes* 「彼女の (人間)」/*dess* 「その (物事)」 (<det +s) には、かつての男・中性単数属格語尾 -s が共通している。入門書の説明とは違って、*hans/hennes/dess* は屈折語尾による属格ではなく、名詞の性・数と無関係に発達した前接語 -s 「～の」を主格または斜格に付加した語形である (ス *hans* <主格 *han* (ア *hann*) +s, ス *hennes* 彼女の <斜格 *henne* (ア 与格 *henni*) +s, ス *dess* (デ/ブ *dets*) <主格 *det* +s)。屈折範疇としてのアイスランド語の属格 *hans* 「彼・その (男性)」/*hennar* 「彼女・その (女性)」/*þess* 「その (中性)」 (←主格 *hann/hún/það*) とは異なる。

しかも、スウェーデン語の複数形 *deras* 「彼(女)・それらの (人間・物事)」は、アイスランド語の *þeirra* (英 *their*) に残るかつての属格形 *dera* を前接語 -s によって補強した二重表示に由来する (第 15 節参照)<sup>11</sup>。デンマーク語とブークモールの *deres* 「同上」 (← *dere* +s) も、属格形 *dere* への前接語 -s による二重表示である。一方、ニューノシユクの *deira* はアイスランド語の属格形 *þeirra* に対応する語形で、前接語は伴わない。

- (20) ス ① *hans* (<主格 *han* +s) *bil* 彼の車  
 ↔ア *billinn hans* (←主格 *hann* の属格) 同上  
*hennes* (<斜格 *henne* +s) *bok* 彼女の本  
 ↔ア *bókin hennar* (←主格 *hún* の属格) 同上  
 ② *deras* (<属格 *dera* +s) *hus* 彼(女)らの家  
 ↔ア *húsið þeirra* (←主格 *þeir/þær/þau* の属格) 同上

現代ゲルマン諸語では、名詞句の文法的役割を担う性・数・格の中で、名詞自体に表示する傾向が顕著な数に対して、性・格は冠詞などの限定詞 (D, *determiner*) に表示する傾向が強い。これは、数が名詞自体に固有の素性で

<sup>11</sup> Braunmüller (2018: 307-309) はスウェーデン語の *hans/hennes/dess/deras* の -s を「屈折による属格の -s」 (“inflectional genitival -s”, *ib.* 307) とみなしているが、これは正しくない。性・数と無関係に種々の格形に付加された -s は、付加が起こった当時、すでに格標識ではなく、前接語に変わっていたと考えられる。

あるのに対して、格は名詞以外に依存する素性であることから理解できる(したがって、名詞に固有の素性であるはずの性が、格と同じく主として限定詞に形態表示されるのは、特異であると言える)。ゲルマン諸語では、限定詞に対して、名詞は格語尾を失う方向に発達してきた<sup>12</sup>。大多数のドイツ語方言では、少数の残存を除いて、単・複数ともに名詞自体の格変化は失われている(Panzer 1983: 1171)。im Haus「家で」に対する慣用句 zu Hause「自宅で」の中性単数与格語尾 -e は、例外的な古形のなごりである。英語やスウェーデン語などのいわゆる所有格 -s/-s が名詞だけに保たれているのは、これを格語尾とみなす限り、自然な形態表示に反していることになる。

## 5. ドイツ語の「無冠詞固有名詞・親族名称 -s」 と属格規則

ドイツ語でも、無冠詞固有名詞・親族名称につく -s [s]「～の」は、格変化、つまり屈折による属格語尾 -(e)s とは異なる<sup>13</sup>。Dom「大聖堂」の属格は Doms/Domes「大聖堂の」だが、Rom「ローマ」では Roms「ローマの」だけであり、Vaterlands/Vaterlandes「祖国の」に対して、Deutschlands「ドイツの」は良くても、\*Deutschlandes は奇妙である。女性名詞の属格は der Frau「その女性(Frau)の」のように無語尾だが、固有名詞・親族名称による {Mutters/Lenas} Kleid「母(Mutter)/レーナ」のドレス」は -s を伴う。

用法も、名詞句内の修飾成分に限られている。無冠詞固有名詞・親族名称の -s は、属格支配の前置詞(21)や動詞(22)の目的語には使えない<sup>14</sup>。

<sup>12</sup> ただし、限定詞の発達後も性・格の形態的区別は衰退している(Panzer 1983: 1172)。

<sup>13</sup> 破擦音(sibilant, [s,ʃ,ts])で終わる男名は -ens (Hansens ← Hans ハンス)、-e [ə]で終わる女名は -ns (Luisens ← Luise ルイーゼ)とする。

<sup>14</sup> ただし、(21)で「unweit + 無冠詞地名 -s」は可能である(unweit Berlins ベルリンから遠くない所で, Duden 1999<sup>3</sup>: 4151)。また、wegen を後置詞として用いると、{Karin/\*Karin} wegen「カーリンのために」(Gallmann 1990: 263)のように逆の分布になる。これは、「von + 属格 + wegen」(オ vanwege)という名詞 Weg「道、方法」に由来するなごりをとどめているためと考えられる。さらに、von **Obrigkeits** wegen「お上のお達しにより」では普通名詞の女性名詞 **Obrigkeits** に -s がつくことから、「von + 名詞 -s + we-

- (21) ド Wir saßen *unweit* {*Peter*/*\*Peters*}. 私たちはペーターから遠く  
ないところにすわっていた (Gallmann 1990: 260)  
Sie kamen nur *wegen* {*Karin*/*\*\*\*Karins*}. 彼らはカーリンのため  
だけに来た (ib. 260)  
*wegen* {*der Mutter*/*\*Mutters*} 母のために  
(Weerman/De Wit 1998: 28)
- (22) ド Wir *bedürfen* {*der Mutter*/*\*Mutters*}. 私たちは母親が必要だ  
(ib. 28)

語順についても、「無冠詞固有名詞・親族名称 + -s」では、特殊なザクセン  
属格 (ド Sächsischer Genitiv) による「A-s+B」(ド *Karls* Hose カールのズボ  
ン) を多用する。とくに 1~2 音節の名詞では、通常の属格に見られる「B +  
A-s」の語順は避ける (ド *das Bild Michelangelos* ミケランジェロの絵  
↔ *\*die Hose Karls* カールのズボン, Duden 2016<sup>8</sup>: 371 変更)。

さらに、「無冠詞固有名詞・親族名称 + -s」は単数形に限られる。一方、屈  
折語尾による属格は単数・複数ともに用い、単独の名詞には使えず、属格規  
則 (ド Genitivregel, Gallmann 1990: 258, 269) に従って、限定詞・形容詞と  
名詞が併存し、どちらかが強変化属格語尾 -(e)s/-(e)r を示す必要がある<sup>15</sup>。

- (23) ド außerhalb {*\*Städte*/*größerer Städte*} {都市/比較的大きな都市}  
の外で (außerhalb von Städten は可) (Gallmann 1990: 260)  
während {*\*\*\*vier Monate*/*dreier Monats*} {4 か月/3 か月} の間  
に (与格による während vier Monaten は可) (ib. 259)
- (24) ド der Konsum {*\*Wassers*/*frischen Wassers*} {水の/新鮮な水の}

---

gen」で固定した表現とも言える。

<sup>15</sup> 一部の属格支配の前置詞による表現には, wegen *Todesfalls* geschlossen 「喪中につき休業」, mangels *Beweises* 「証拠不足により」, infolge *Versagens* der Bremsen 「ブレーキの不作動のために」のような例外がある。これは古形の残存であり、少数の古風な定型表現に限られる (Gallmann 1990: 261)。

の消費 (Duden 2009<sup>8</sup>: 968)

die Behandlung {\**Patienten/der Patienten*} 病人たちの診察

(Weerman/De Wit 1999: 1186)

die Verarbeitung {\**prima Holzes/tropischen Holzes*} {第一級の  
(prima 無変化) 木材の/熱帯性の木材の} 加工

(Gallmann 1990: 263f.)

die Aufgaben {*jeden Schülers/jedes Schülers*} それぞれの生徒  
の課題

⇔die Aufgaben {\**jeden Studenten/jedes Studenten*} それぞれ  
の大学生の課題 (Lindauer 1995: 202)

(25) ド Er entledigte sich {\**Holzes/faulenden Holzes*}. 彼は {木材を/朽  
ちつつある木材を} 片づけた (Gallmann 1990: 266)

Wir waren {\**Gedränges/des Gedränges*} satt. 私たちは {人混み  
に/その人混みに} うんざりしていた (ib. 267)

属格規則の存在は、ドイツ語でもまた、一般に屈折範疇としての属格が使用制限を受けて衰退傾向にあることを示唆している。その中で、限定詞を伴って格変化を表示する普通名詞は、属格を保っているが、無冠詞固有名詞・親族名称は、属格を含むすべての格変化を失っていると言える。

英語やスウェーデン語のいわゆる所有格 -s/-s は、つねに名詞に前置し、無生名詞に使うこともある (英 *Life's Little Ironies* 人生の小さな皮肉 (Thomas Hardy の短編集), ス *livets* mening 人生 (livet, -et 定冠詞) の意義, ス en *tre kilometers* asfalterad raksträcka 3キロ (tre kilometer) のアスファルトで舗装された (en~asfalterad) 直線道路 (en 不定冠詞), Andersson 1994: 290)。所有以外にも、種々の意味を表す (英 *Sophie's choice* ソフィーの選択, *children's* education 子供たちの教育; ス *fiendens* anfall 敵の襲撃 (fienden, -(e)n 定冠詞, Andersson 1994: 289f.), ス *solsystemets* upptäckt 太陽系 (solsystemet, -et 定冠詞) の発見)。被修飾名詞との語順や種類についての違いはあっても (ド *Cäsars* Eroberung *Galliens*/die

Eroberung *Galliens* durch Cäsar カエサルのガリア征服, Lindauer 1995: 128), ドイツ語の「無冠詞固有名詞・親族名称 + -s」は英語やスウェーデン語の -'s/-s に類似している。つまり, ドイツ語にも屈折による属格以外に, 「英 A-'s/ス A-s+B」に相当する「無冠詞固有名詞・親族名称 A-s+B」があり, この -s は属格語尾ではなく, 「英 A-'s/ス A-s+B」に対応する前接語に再分析されていると言える。

最後に, ドイツ語の無冠詞固有名詞は, 修飾語がつくと, 冠詞などの限定詞を伴うが (ド Werther ウェルテル → der junge Werther 若きウェルテル), 属格形でも現代語では無語尾である (ド *Die Leiden des jungen Werther-Ø* (1787 < *Werthers* 1774) 『若きウェルテルの悩み』)。男性の国名も, 定冠詞を伴う属格では無語尾形が多い (ド (der) Iran イラン → Irans/des Iran-Ø)。一方, アイスランド語の無冠詞固有名詞は, 親族名称を含めて, 属格形が通常の名詞と同形であり, 屈折語尾による属格を保っている。

- (26) ア
- ① 強変化男性名詞: 主格 fjörður フィヨルド/Hörður ヘルズル (男名) — 属格 fjarðar/Harðar
  - ② 強変化女性名詞: 主格 borg 町/Finnborg フィンボルグ (女名) — 属格 borgar/Finnborgar
  - ③ 弱変化男性名詞: 主格 safi ジュース/Torfi トルヴィ (男名)/afi 祖父 — 属格 safa/Torfa/afa
  - ④ 弱変化女性名詞: 主格 panna フライパン/Anna アンナ (女名)/amma 祖母 — 属格 pönnu/Önnu/ömmu
  - ⑤ 強変化中性名詞: 主格 land 国, 地方/Þýskaland ドイツ — 属格 lands/Þýskalands (↔ド 主格 Land/Deutschland — 属格 Lands~Land(e)s/Deutschlands~\*Deutschlandes)

## 6. 群属格と所有格 -'s/-s の脱文法化

ここで想起されるのが, 名詞句全体の末尾に -'s をつけて後続名詞につな

げる群属格 (group genitive)<sup>16</sup>である。英語では次の3種類が含まれる。

- (27) 英 ① 前置詞句を伴う名詞句：[A + 前置詞句]’s + B  
*the Queen of England’s* throne [英国 (の of) 女王] の (-’s)  
王冠
- ② 並列項を含む名詞句：[A<sub>1</sub> and/or A<sub>2</sub>]’s + B  
*John and Mary’s* cottage [ジョンとメアリー] の (-’s) 別荘  
*an hour and five minutes’* walk [1時間5分] の (-’ ← -’s)  
徒歩
- ③ 関係文を伴う名詞句：[A + 関係文]’s + B  
*a man I know’s* daughter [私が知っている男性] の娘

スウェーデン語では、③は稀だが、①は普通であり、②も単なる機械的列挙を除けば可能である (Holmes/Hincliffe 2013<sup>3</sup>: 54)。

- (28) ス ① *mannen på gatans* åsikter 一般人 (通りの (på gatan) 人 (mannen, -en 定冠詞) の (-s) 見解 (Andersson 1994: 289)  
*kungen av Danmarks* slott [デンマーク (Danmark) の (av) 王 (kungen, -en 定冠詞)] の (-s) 城 (Norde 1997: 68)
- ② *farbror och fasters* villa [父方の叔父 (farbror) と (och) 叔母 (faster)] の (-s) 別荘 (機械的列挙ではない例) (ib. 82)

ドイツ語でも、無冠詞固有名詞・親族名称について、上記の①と身近な対表現による②の用法は許される。(29) ①の von Eschenbach, von der Vogelweide の von は本来、与格支配の前置詞であり、属格語尾 -s は伴わないことに注意。

<sup>16</sup> 「群属格」は屈折範疇としての格を指すのではなく、便宜的な俗称と言える。

- (29) ド ① **Wolfram von Eschenbachs** „Parzival“ ヴォルフラム・フォン・エシェンバハ (Wolfram von Eschenbach) の (-s) 『パルツィヴァール』 (Duden 1998<sup>6</sup>: 246)  
 {**Walther von der Vogelweides**/\***Walthers von der Vogelweide**} Sprache ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデ (Walther von der Vogelweide) の (-s) 言語 (Fuß 2011: 37)
- ② **Hänsel und Gretels** Heimwegspur ヘンゼルとグレーテル (Hänsel und Gretel) の (-s) 家路の跡 (Duden 2009<sup>8</sup>: 211)  
 die Geschichte vom Sündenfall **Adam und Evas** アダムとイヴ (Adam und Eva) の (-s) 原罪の物語 (ib. 211)

以上の事実は、3言語の '-s/-s は、使用範囲の差はあるが、名詞句末に添えた前接語に変わっていることを裏付けている (Janda 1980, Endresen 1988<sup>3</sup>: 101f., Haugen 1982: 104, Haberland 1994: 324f., Norde 2009: 160, Fuß 2011)。

文法的役割を担う機能項目が語彙項目として独立性を強めていく歴史的变化の過程を脱文法化 (degrammaticalization) と言う。「語彙項目>文法項目>接語 (clitic)>接辞 (affix)>屈折語尾」という逆の過程をたどる文法化 (grammaticalization) に比べて稀なケースだが、「所有格 '-s/-s>前接語 '-s/-s」の発達は脱文法化の好例と言える (Norde 1997)。それは上述の言語で「英語>スウェーデン語>ドイツ語>アイスランド語」の順に進行しており、屈折語尾による属格の衰退度に対応している。「A'-s/s+B 構文」の文法化もこの順に進んでいる。

前接語に変わった所有格 -s は、デンマーク語にも見られる。Haberland (1994: 324f.) は -s が属格語尾ではないと明言し (“... there are no corresponding traces of the historical inflectional system of nouns. Even the suffix -s attached to nouns represents a group genitive, not a genitive case.”, ib. 324), その理由に、**Kongen af Danmarks** bolsjefabrik デンマーク王立 (=デンマーク国王 Kongen af Danmark) の (-s) 砂糖菓子工場が英語の群属格と同



様に, \* [Kongens af Danmark] bolsjefabrik とは言えない事実と, 前置詞残留を起こした関係文に-s が付加される例を挙げている (デ Det er [ *pigen* [ *Uffe bor sammen med* ] ] s datter. これは (det) [[ウフェが (Uffe) (ソノ人ト, Ø (=関係詞 som の省略) ~ med 前置詞「~と」) いっしょに (sammen) 住んでいる (bor)] 女の子 (pigen, -(e)n 定冠詞)] の (-s) 娘 (datter) です (er), ib. 324 変更)。

ノルウェー語でも, 所有格由来の -s は, 第 10 節 (39) に示すように, 英語の群属格 (27) ①~③の用法がすべて可能である。その際, 先行語と -s の間に休止を置き, -s を後続名詞に続けて発音することがある (Torp 1992: 165)。これは先行語からの -s の独立性を示唆し, 所有格 -s の脱文法化を物語っていると考えられる。

(30) ブ *NSB... s-nattog* er forsinka. NSB (=Norges Statsbaner, ノルウェー国鉄) の (...s←-s) 夜行列車は (nattog) 到着が遅れた (er forsinka) (Torp 1992: 165)

ブ Det er et eksempel på hvordan *Carl I. Hagen... s-prinsipper* vil virke. それは (det) どのように (hvordan) カール I. ハーゲン (ノルウェーの政治家 1944-) の (...s←-s) 原則が (prinsipper) 効力を発揮することになるか (vil virke) ということの (på) 一例 (et eksempel) である (er) (ib. 165)

オランダ語の無冠詞固有名詞・親族名称につく -s にも, *Jan en Piets* huis 「ヤンと (en) ピートの家」 (Weerman/De Witt 1999: 1167), *Pa, Ma, en de kinderens* verjaardag 「パパ, ママ, そして (en) 子供たちの誕生日」 (Booij 2010: 218 変更) のように, 並列句②での用法がある。この -s もまた前接語に変わっている。

以上のように, いわゆる所有格 -s/-s だけを残すように見える一連の現代ゲルマン語では, 人称代名詞を除いて, 屈折語尾による格変化は完全に消滅していると言える。

## 7. 再述所有代名詞構文

これまで見た範囲では、ゲルマン諸語の「A の B」という所有表現（限定所有 attributive possession）には、(31)①～③が挙げられる。とくに前置詞句構文は名詞句間の種々の関係を表し、所有はその一部にすぎない。それに加えて、名詞句 A を所有代名詞で「再述する」という意味で、(31)④の再述所有代名詞構文（resumptive possessive pronoun construction）がある<sup>17</sup>。

- (31) ① 属格構文：「B+属格 A」(ド der Hut *meines Vaters* 私の父の帽子)  
 ② 所有格構文（= 前接語構文，「-'s/-s 構文」）：「A-'s/-s+B」(英 *my father's* hut/ド *Vaters* Hut)  
 ③ 前置詞句構文：「B+前置詞+A」(英 the hut *of my father*/ド der Hut *von meinem Vater*)  
 ④ 再述所有代名詞構文：「A+所有代名詞+B」(ド *meinem Vater sein* Hut)

ドイツ語では、再述所有代名詞構文に *meinem Vater sein* Hut 「私の父の (meinem Vater 与格 (← mein Vater) + sein 彼の) 帽子」のように、所有の与格 (possessive dative) を用いる。方言的とされるこの構文は、[*Meinem Vater*] nahm er [*seinen Hut*].> Er nahm *meinem Vater seinen Hut*. 「彼は私の父の帽子を取った」の「人間与格+物事対格」が単一の名詞句に再分析されて生じたと言われている (ブルンナー 1973 : 417, 相良 1965 : 114)。初期の例は、オトフリート (Otfrid) の福音書 (863-871 頃) (古高ド *thaz ih druhtine sīnan sun* souge 私が主の (druhtine 与格 (← druhtin) + sīnan 彼の (対格← sīn)) 息子を (sun 対格) 授乳できるように, Lockwood 1968: 21,

<sup>17</sup> これ以外にも、人間名詞を中心に用いるフェロー語の所有の対格による構文 (第 8 節)、弱変化属格や属格由来要素の多重表示による構文 (第 15 節) がある。

Dal/Eroms 2014<sup>4</sup>: 26) や 9 世紀の『メルゼブルクの呪文』(ド *Merseburger Zaubersprüche*) (古高ド *demo Balderes volon sin* vuoz バルドルの子馬の足, Schirmunski 2010 (1962): 497) に見られる。本格な使用は、属格の衰退が顕著になった 12 世紀末以降とされている (Torp 1992: 154)。

この構文は、Bastian Sick: *Der Dativ ist dem Genitiv sein Tod I ~ VI* 『与格は属格の死なり I ~ VI』(2004~2015) というベストセラーの題名で有名になった。その題名が示唆する別の例は、属格支配の前置詞である。ドイツ語の属格支配の前置詞には、話し言葉で与格も支配する例が多い(ド *trotz* {*des Regens/dem Regen*} 雨にもかかわらず — *trotzdem* それにもかかわらず, während {*des Essens/dem Essen*} 食事中に, wegen {*deiner/dir*} 君ゆえに)。初期新高ドイツ語期以降に生まれた名詞起源の語が多く、「名詞 + 与格・属格」(ド *trotz* < *Trotz* 反抗) または「与格支配の前置詞 + [名詞属格 + 前置詞]」(ド *wegen* < *von* + 名詞属格 + *wegen* (< *Weg* 道)) (オ *vanwege*) から発達し、与格を伴うこともあった。während 「~の間に」 (< *währen* 続く) は動詞の現在分詞に由来し、属格支配 (ド *in der Zeit während der Kriege* 長引く戦争の時に) または与格支配 (ド *in während der Zeit* 継続する時間に) で用いた (Pfeifer 2003<sup>2</sup>: 1467, 1532, 1545f.)。こうした与格支配との競合を経て、20 世紀になって、とくに書き言葉で属格支配として定着した (Admoni 1970<sup>3</sup>: 115)。

たしかに、属格を失ったスイスドイツ語チューリヒ方言の前置詞 *trotz/wäaret/wäge* (ド *trotz/während/wegen*) は与格支配である<sup>18</sup>。イディッシュ語でも、属格(複数)は衰退を「与格 + 前接語 -s」で代用する。名詞句の末尾につくこの -s は、いわゆる所有格 -s/-s と同じ前接語であり、イディッシュ語の格組織は主・対・与格の 3 種類とみなす意見が強い (Hoge 2018)。

<sup>18</sup> チューリヒ方言には属格の残存があり、「~家 (の人々)」はその一例である (f. Das isch *s Meiers* Bueb. これはマイエルさん一家の (de Meier の属格) 男の子です (Beilstein-Schauvelberger 2007<sup>2</sup>: 78)。標準ドイツ語の *Buddenbrooks* 『ブッデンブローク家の (Buddenbrook の属格) (人々)』 (Thomas Mann) も同様 (第 16 節参照)。

- (32) イ 男性 [dem gutn lerer]s bukh その良い教師の本  
 ← dem gutn lerer 与格 + -s ← der guter lerer 主格  
 女性 [der guter lererin]s bukh その良い女性教師の本  
 ← der guter lererin 与格 + -s ← di gute lererin 主格  
 中性 [dem gutn kind]s bukh その良い子供の本  
 ← dem gutn kind 与格 + -s ← dos gute kind 主格  
 (Hoge 2018: 239)

しかし、ドイツ語で動詞・形容詞の属格目的語に替わったのは、Schmid (2010: 99-101) の指摘を待つまでもなく、第2節で述べたように、対格と前置詞句である。すべての属格が与格に引き継がれたわけではない。

## 8. フェーロー語の前置詞の格支配と所有の対格

主・対・与格は保つが、属格は衰退が激しいフェーロー語でも、属格の代わりに対格を用いる例がある。たとえば、属格支配の5つの前置詞 til 「～へ(方向)」 / (i)millum 「の間に」 / vegna 「～ゆえに」 / innan 「～の内側に(場所)」, ～以内に(時間) / uttan 「～なしで」では、属格の使用は無冠詞名詞を含む固定表現と慣用句に限られる。その他の一般的表現では対格を用いる<sup>19</sup>。

- (33) ㉞ ① 固定表現・慣用句：属格支配  
 oman til **strandar** 岸辺 (strandar 属格：無冠詞女性名詞 ← strond 主格) に降りて (英 down to shore)  
 (Thráinsson et al. 2004: 63)
- ② その他の一般的表現：対格支配  
 oman til **strondina** その岸辺 (strondina 対格：女性名詞 +

<sup>19</sup> Hamre (1961: 240) の調査によれば、til と (i)millum の2語が実際の属格支配の用例のほとんどすべてを占める。

-ina 後置定冠詞← strondin 主格) に降りて (英 down to the shore) (ib. 63)

oman til *eina vakra strond* ある美しい岸辺 (eina vakra strond 対格: 不定冠詞+形容詞+女性名詞← ein vøkur strond 主格) に降りて (英 down to a beautiful shore) (ib. 63)

フェーロー語では、代表的な譲渡不可能所有 (inalienable possession) である親族関係にも「B+所有の対格 A」を用いる。この「所有の対格」(accusative of possession)<sup>20</sup> は事物の所有など、親族関係以外の表現には用いない。

(34) フエ beiggi *drongin* その男の子の (drongin 対格: drong+in 定冠詞← drongurin 主格: drongur+in) の兄弟  
(Thráinsson et al. 2004: 252)

↔\*súkkla *drongin* その男の子の自転車 (ib. 252)

abbi *lítla Jógvan* 小さなイエグヴァンの (lítla Jógvan 対格← lítlí Jógvan 主格) の祖父 (Lockwood 1977<sup>3</sup>: 103)

↔\*bók *lítla Jógvan* 小さなイエグヴァンの本

この所有の対格には、19世紀半ばから用例がある (Petersen 2016: 110)。筆者の調査でも、言語学者ヤコブセン (Jakob Jakobsen 1864-1918) が収集した著名な『フェーロー諸島の伝説とメルヒエン』(デ *Færøske folkesagn og æventyr* 1898-1901) で次の用例が確認された。

(35) フエ Tey spurdu hann, hvør ið hann var, men hann svaraði, at hann var *sonur mommu sína* — annað visti hann einki at siga. 彼らは (tey) 彼に (hann) 彼がだれかと (hvør ið hann var) たずねた

<sup>20</sup> 「所有の対格」は Lockwood (1977<sup>3</sup>: 103) が用いた「所有の対格単数」(accusative singular of possession) という用語による名称である。

(spurdu) が, しかし (men), 彼は (hann) 自分の母親の息子だ (var sonur **mommu sína** (与格←主格 *momma sín*) と (at) 彼は答えた (hann svaraði) —ほかには (annað) 言うべきことを (at siga) 彼は (hann) 何も知らなかった (visti~einki)<sup>21</sup> (ib. 33)

ただし, Barnes/Weyhe (1994: 208) によれば, 所有の対格は最近の半世紀間で衰退傾向にある。最も一般的なのは (57) の前置詞句による表現である。

## 9. ドイツ語諸方言と西ゲルマン諸語の再述所有代名詞構文

ドイツ語諸方言を見渡すと, 再述所有代名詞構文には, 南部から北部に移るにつれて次の5つの型が認められる。便宜的に標準語の語形で例示する (Koß 1983: 1244)。

- (36) ① 所有の属格型 **'s Vater**<sup>22</sup> sein Haus 父の家 (主・対・与 (・属) 格方言)
- ② 所有の与格型 **dem Vater** sein Haus (主・対・与格方言)
- ③ 所有の与格・対格混合型 **dem Vater** sein Haus/**die Frau** ihr Sohn 母の息子 ~ **den Vater** sein Haus/**der Frau** ihr Sohn (主・対 (・与) 格方言)
- ④ 所有の対格型 **den Vater** sein Haus/**die Frau** ihr Sohn (主・対格方言)
- ⑤ 所有の統一格型 **de' Vater** sein Haus/**die Frau** ihr Sohn (格変化衰退方言)

<sup>21</sup> <https://ia800203.us.archive.org/0/items/frskefolkesagno00jakogoog/frskefolkesagno00jakogoog.pdf> 参照。復刻版 Jakobsen (1984: 45) から確認できる。

<sup>22</sup> Koß (1983: 1245) の用例では **s'Vaters** sein Haus となっている。

最も保守的なのは、南西部の上部ドイツ語アレマン方言、すなわちスイス方言の一部を中心とする所有の属格（ド possessiver Genitiv）による①型である。次に、属格の衰退で所有の与格（ド possessiver Dativ）を用いた②型が南部から中部にかけて広く観察される。中部ドイツ語を中心とする中部地域では、男性と女性の間で③の与格・対格混合型が見られる。これは与格の衰退による対格との融合を示す中間段階と言える。そして、形態的簡素化が進んだ北部の低地ドイツ語を中心に、与格が対格または主格と融合した結果、所有の対格（ド possessiver Akkusativ）による④型となり、さらに格変化が衰退した北部の方言で、所有の統一格（ド possessiver Einheitskasus）による⑤型に至る。

再述所有代名詞構文に見られる「属格の死」は、与格だけに継承されたのではない。格変化の衰退後も、順次、他の格によって受け継がれていった。

再述所有代名詞構文は西ゲルマン諸語に広く見られる。格変化の衰退が顕著なオランダ語と北海ゲルマン語の後裔である西フリジア語も、例外ではない<sup>23</sup>。人称代名詞以外で対格と与格も失った両言語は、⑤型に属する。

(37) オ **{Jan z'n/Lisa d'r/Jan en Lisa hun}** hoed {ヤン/リーサ/ヤンとリーサ} の (z'n [zən] 彼の/d'r [dər] 彼女の/hun 彼(女)らの) 帽子

西フ **{heit syn/mem har/heit en men har}** hoed {heit 父/mem 母/heit en mem 父と母} の (syn 彼の/har 彼女の/har 彼(女)らの) 帽子

オランダ語では、話し言葉で (37) の再述所有代名詞構文を多用し、前置詞 van 「～の」による de hoed **van {vader/moeder}** 「父/母の帽子」のほかに、前接語 -s による **{vaders/moeders}** hoed 「同左」も併存している。西フリジア語では、(37) が最も一般的であり、前置詞 fan 「～の」による de hoed

<sup>23</sup> オランダ語圏北西部に隣接する西フリジア語には、オランダ語の影響が著しい。

*fan* {*heit/mem*} 「同左」よりも自然である。それ以外に、第 14 節で述べる弱変化属格 -e に由来する {*heite/memme*} hoed 「同上」も用いる。

さらに、英語にも、第 13 節で述べるように、15~17 世紀にかけて his- 属格 (英 *Christ his* birth キリストの誕生) と呼ばれる同類の構文があった。

## 10. ノルウェー語の再述所有代名詞構文 (sin 構文)

一般に北ゲルマン語には、再述所有代名詞構文は見られない。例外はノルウェー語で、*far sin* hatt 「父の (far 父+sin 彼の) 帽子)」のように「A + sin + B」とする。ブークモール、ニューノシュクともに人称代名詞以外で格変化は失われており、所有の統一格による (36)⑤型に属する。sin は後続名詞の性・数に一致して、「彼の、彼女の、彼(女)らの」のどの意味も表し、*far* {*sin hatt/si skuld/sitt hus/sine bøker*} 「父の {(sin) 帽子 (男性単数)/ (si) 責任 (女性単数)/ (sitt) 家 (中性単数)/ (sine) 本 (複数)}」, {*far sin/mor sin/far og mor sin*} unge {父/母/父と母} の (sin) 男の子 (男性単数)」となる。

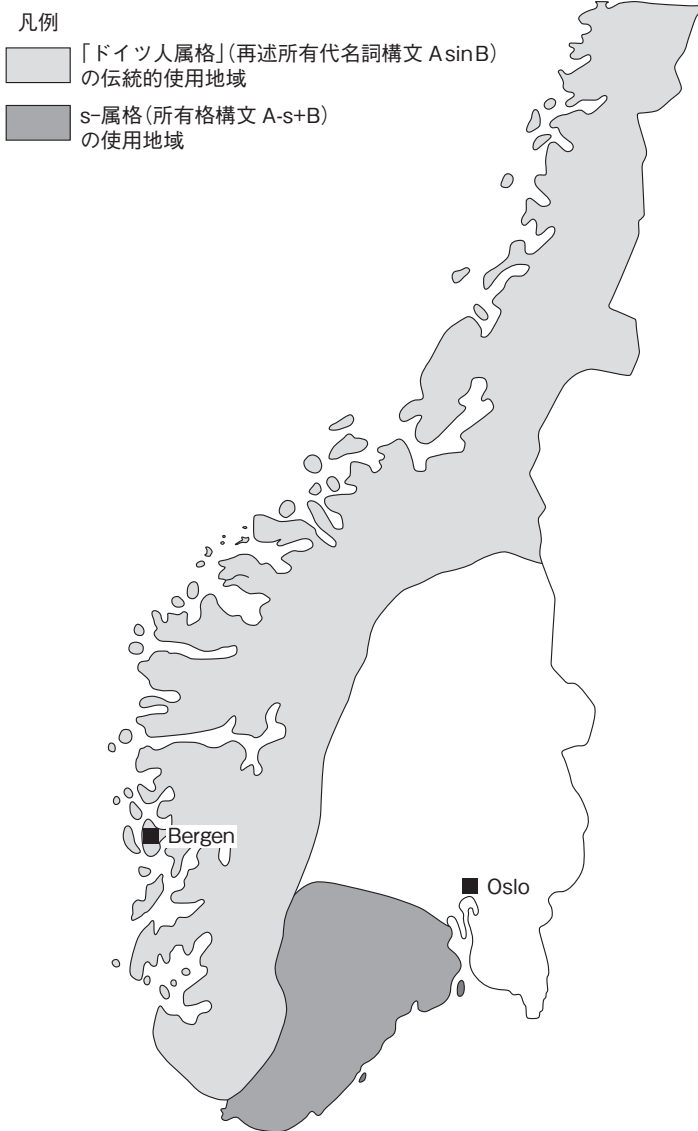
この構文は「ドイツ人属格」(ブ garpegenitiv)<sup>24</sup>とも呼ばれ、中世後期のハンザ商人の北欧進出による中低ドイツ語の影響とされている。つまり、西ゲルマン語の影響が北ゲルマン語に及んだ例である<sup>25</sup>。その影響が強かった西部の中心地ベルゲン (Bergen) から、いわゆる所有格 -s に替わって西部と北部のニューノシュク使用地域に広く普及した (Vinje 1987<sup>4</sup>: 199)。現在では、東部のオスロ首都圏のブークモール使用地域にも普及し、話し言葉や非公式の書き言葉でも用いる (Torp 1992: 152, Faarlund 2019: 35)。

<sup>24</sup> 民俗学者・言語学者モルトケ・ムー (Moltke Moe 1859-1913) の命名による名称で (Vinje 1987<sup>4</sup>: 199, Torp 1992: 151, 159), garp は中世後期のドイツ人入植者の蔑称。

<sup>25</sup> Braunmüller (2018: 317) によれば、デンマーク語西および南ユトランド方言では、非再帰的な所有代名詞 hans 「彼の」(ラ ēius) を用いた Olaf *hans* bil 「ウーラヴの車」という表現がある。同方言も歴史的に西ゲルマン語との接触が密接である。



(38) ノルウェー語の所有格構文と再述所有代名詞構文



(Torp 1992: 152 変更)

用法も多彩である。ブークモールの例を挙げると, (39)に示すように, (27)で述べた①前置詞句を伴う名詞句, ②並列項を含む名詞句, ③関係文を伴う名詞句という英語の群属格の用法がすべて可能である。

- (39) ブ ① [**den gamle mannen med skjegget**] **sitt** hus 髭を生やした (med skjegget) 老人の (den gamle mannen (その) 老人~sitt 中性単数) 家 (中性) (Norde 1997: 92)
- ② Det er [**Rikke og mitt**] **sitt** hus. これはリッケと私の (Rikke og mitt 所有代名詞 + sitt 中性単数) 家 (hus 中性) です (er) (Vinje 1987<sup>4</sup>: 205)
- ③ Var det [**han som reiste til Amerika**] **si** **dotter**? それは (det) アメリカへ (til Amerika) 旅行した (som 関係詞~reiste) 彼の (han 彼~si 女性単数) 娘さん (dotter 女性) でしたか (var) (Næs 1979<sup>4</sup>: 336)
- Det kan være min feil som vokalist, og det kan også være [**den som mikser**] **sin** **feil**. それは (det) 歌手としての (som vokalist) 私の過失 (min feil) かもしれない (kan være), そして (og) それは (det) また (også) 音源を編集する (som 関係詞 + mikser) 人の (den 指示代名詞~sin 男性単数) 過失 (feil 男性) かもしれない (kan være) (Torp 1992: 161)

疑問代名詞を先行詞とする hvem sin hatt 「だれの帽子」では, 疑問代名詞 hvem 「だれ」を「sin + 名詞」から分離できる。hvem sin 「だれのもの」のように, 名詞句に相当する独立用法 sin 「~のもの」も可能である。

- (40) ブ **Hvem** er det **sin** **hatt**? それは (det) だれの (vem だれ + sin 男性単数) 帽子 (hatt) ですか (er) (Vinje 1987<sup>4</sup>: 204)
- Hvem** er det da **sin**? あれは (det da) だれのもの (vem + sin 男性単数) ですか (er) (ib. 204)

ただし、北ゲルマン語に共通して、ノルウェー語の所有代名詞には、先行詞の性・数と無縁の再帰形 *sin* 「自分の」(ラ *suus*) と非再帰形 *hans/hennes* 「彼/彼女の」(ラ *ëius*) の区別がある。(41) はノルウェー語本来の再帰形 *faren sin* 「自分の(=彼女の) 父親」と低地ドイツ語由来の再述所有代名詞構文による *sin stemme* 「彼の(=父親の) 声」による対比を示す例である。

- (41) プ *Hun<sub>i</sub> hørte faren<sub>i</sub> sin<sub>i</sub> sin<sub>i</sub> stemme.* 彼女は (*hun<sub>i</sub>*) [自分の父親の (*faren<sub>i</sub>*, *sin<sub>i</sub>* 自分の(=彼女自身の) 父親 + *sin<sub>i</sub>*) の] 声<sup>が</sup> (*stemme*) 聞こえた (*hørte*) (Haugen/Borin 2018<sup>3</sup>: 145)  
 比較: *Han<sub>i</sub> hørte {sin<sub>i</sub>/hans<sub>i</sub>} stemme.* 彼は {自分の(=彼自身の)/ (別の) 彼の} 声が聞こえた

ノルウェー語ブークモールには、方言的表現として、*han Per* 「彼、ペール」の属格 *hans Pers* のなごりによる *hatten hans Per* 「ペールの帽子」があり、この場合には非再帰形 *hans* を用いる。属格を保つアイスランド語でも、*hatturinn hans Péturs* 「ピエートルの帽子」(属格 *hans Péturs* ←主格 *hann Pétur*) となる。再帰・非再帰の区別を失った中低ドイツ語 *sin* (ド *sein* 彼の) の借用によるノルウェー語の構文は、この点で革新的である (Torp 1992: 153)。なお、所有者が後続する *hatten hans Pers* では、被所有者 *hatten* 「帽子」は後置定冠詞 *-en* を伴うが、所有者が先行する *Per sin hatt-Ø* では後置定冠詞を伴わない。この関係は、他の所有表現でも同様である (プ *hatten min* ↔ *min hatt-Ø* 私の帽子)。

北ゲルマン語の中でも、デンマーク語ユトランド方言の所有代名詞 3 人称には、単・複数ともに再帰・非再帰の区別がない。これも隣接する低地ドイツ語との接触による影響と考えられている (Torp 1992: 156)。同様に、(標準)デンマーク語の所有代名詞 3 人称複数形 *deres* にも再帰・非再帰の区別がなく、その他の北ゲルマン語の標準語とは異なる (デ *De tog deres hatte.* 彼らは自分たちの/(別の)彼らの帽子を取った ↔ プ *De tok {sine/deres} hatten.* 彼らは {自分たちの (*sine* ← *sin*)/(別の)彼らの (*deres*)} 帽子を取った/

ス De tog {*sina/deras*} hattar. 同左 (sina ← sin)。

以上のように、ノルウェー語の再述所有代名詞「A + sin + B」構文は、sin が先行する A と性・数で一致せず、語頭音 s- が共通の sin/si/sitt/sine をつねに用いる。そして、このことによって、所有格由来の「A-s+B」構文との共通点を獲得した。第 12, 13 節で述べるように、両者は歯茎摩擦音 s を共有する同類の構文に発達したと言える。

## 11. アフリカーンス語の再述所有代名詞構文 (se 構文) と文法化

この傾向を推し進めたのが、アフリカーンス語の「se 構文」である。この構文でも、(27) で述べた ①前置詞句を伴う名詞句、②並列項を含む名詞句、③関係文を伴う名詞句という英語の群属格の用法は、すべて可能である。所有格由来の -s 「～の」は残っていない。アフリカーンス語には属格由来の -s は残っておらず、前接語 se は用法の点でも、オランダ語の -s よりも英語の 's に似ている (Kirsten 2019: 108)。

(42) 77 ① [*die mense daar oorkant*] *se* hond あそこの向こう側の (daar oorkant) 人たち (die mense) の (se) 犬 (hond)

(De Villiers 1987<sup>2</sup>: 114)

[*baie van hulle*] *se* Zoeloe 彼らの (van hulle) 多く人たち (baie) の (se) ズールー語 (Zoeloe) (Donaldson 1993: 100)

② [*Sannie en Piet*] *se* pa サニ (女名) と (en) ピト (男名) の (se) 父 (pa)

[[*Sannie en Piet*] *se pa*] *se* naam [サニ (女名) と (en) ピト (男名)] の (se) 父 (pa) の (se) 名前 (naam)

(McDermott 2005: 87 変更)

③ [*die seuntjie wat beseer is*] *se* ouers けがをした (wat 関係詞 + beseer is) 息子 (die seuntjie) の (se) 両親 (ouers)

(De Villiers 1987<sup>2</sup>: 114)

[*my koei wat dood is*] *se* vel 死んだ (wat 関係詞～dood is)  
私の雌牛 (my koei) の (se) 毛皮 (vel) (Ponelis 1979: 126)  
[*Vyf van die twaalf mense wat nog in die hospitaal  
behandel word*], *se toestand* is kritiek. まだ (nog) 病院で  
(in die hospitaal) 治療を受けている (wat 関係詞～behandel  
word) 12 人の中の 5 人 (vyf van die twaalf mense) の (se) 状  
態は (toestand) 深刻だ (is kritiek) (Donaldson 1993: 98)

「se 構文」は無生名詞にも用いる。この場合にも、(42)②に示した有生名詞の例と同様に、se を重ねることができる。

(43) 77 *Johannesburg se* verkeer ヨハネスブルフの交通

(Ponelis 1979: 128)

*die TV se* skerm テレビの画面 (ib. 151)

*vyf minute se* werk 5 分間の仕事 (Donaldson 2000: 17)

[[*Die kind*] *se potlood*] *se punt* is stomp. その子供 (die kind) の  
(se) 鉛筆 (potlood) の (se) 芯は (punt) とがっていない (is stomp)

(Donaldson 1993: 98)

第 10 節 (40) に示したノルウェー語の名詞句 + sin 「～のもの」と同じく、  
名詞句 + s'n [sən] 「～のもの」の語形で独立用法も可能である。

(44) 77 Dit is *Piet s'n*. これは (Dit) ピトのもの (Piet s'n) です (is)

(De Villiers 1987<sup>2</sup>: 115)

Die skrum is nie *Engeland s'n* nie, maar *Suid-Afrika s'n*. その  
スクラムは (die skrum) イギリスのもの (Engeland s'n) ではなく  
(is nie～nie, maar), 南アフリカのもの (Suid-Afrika s'n) だ (is)

(McDermott 2005: 87)

Daardie hond se stert is kort maar **hierdie s'n** is lang. あの犬の尻尾は (daardie hond se stert) 短い (is kort) が (maar), こちらの (hierdie s'n = hierdie hond se stert) 長い (is lang)

(Donaldson 1993: 100)

疑問代名詞 wie se + 名詞「だれの」/wie s'n「だれのもの」や対応する関係詞 wie se + 名詞 (オ wie z'n 話し言葉, 英 whose) も同様である。

(45) 77 **Wie se handsak** is dit? これは (dit) だれの (wie se) ハンドバッグ (handsak) ですか (is) (Donaldson 1993: 99)

Ik weet nie {**wie se handsak/wie s'n**} dit is nie. 私は (ik) これが (dit) だれの (wie se) ハンドバッグ (handsak)/だれのもの (wie s'n) なのか (is) 知らない (weet nie~nie) (ib. 99f.)

Sannie is de dogter **wie se pa** Jan is. サニは (Sannie) (ソノ人, wie 関係詞 + se) 父親が (pa) ヤンである (Jan is) 娘さんです (is de dogter) (McDermott 2005: 67)

しかも, se は先行詞の性・数と一致せず, 無変化である。「彼/彼女/彼(女)らの名前」は所有代名詞を用いて, **sy** naam/**haar** naam/**hulle** name と言う。

先行語と続けて発音する無アクセントの se [sə] は, 所有代名詞から名詞句に添えた無変化の前接語に変わっている。一方, オランダ語では, 所有代名詞はアフリカンス語と同様に, **zijn** naam/**haar** naam/**hun** namen「同上」のように, 先行詞の性・数と一致する。話し言葉で用いる再述所有代名詞構文も, 第9節(37)で述べたように, 所有代名詞 zijn「彼の」/d'r「彼女の」/hun「彼(女)らの」の弱形を含む z'n [zən] /d'r [dər] /hun による **Jan z'n/Lisa d'r/Jan en Lisa hun** hoed「{ヤン/リーサ/ヤンとリーサ}の帽子」となり, 先行詞の性・数と一致する。

ただし, オランダ語話者の幼児は, {**mama/papa**} se boek「{ママ/パパ}の本」のように, z'nにあたる se を先行詞の性・数とは無関係に, デフォルト形

として使う傾向があるという (Weerman/De Wit 1999: 1173)。アフリカーンス語の「se 構文」の発達には、オランダ語のこのデフォルト形 *se* との関係が想起される。中期オランダ語でも、*zyn/zine* (オ *zijn*, ド *sein*) を女性名詞に用いることが少なくなかった (中期オ *myn vrouwe van Orlyens zyn zuster* オルレイエン出身の私の妻の姉妹, Weerman/De Wit 1999: 1173, 1998: 33)。なお、第 13 節で述べる英語の *his*- 属格も、先行詞の性・数と無関係に用いることが多かった。

アフリカーンス語の「se 構文」の起源は、14/15 世紀以来、オランダ語で用いられるようになった再述所有代名詞構文を 17 世紀に借用した事実に求められる (Kirsten 2019: 106-134)<sup>26</sup>。「se 構文」は、属格由来の所有格から名詞句への前接語に変わった英語やスウェーデン語などの「-'s/-s 構文」に対応する。ただし、「属格語尾 > 前接語 -'s/-s」という脱文法化とは逆に、「所有代名詞 *sy/haar/hulle* > *se*」の変化は、語彙項目が独立性を弱め、文法的役割を担う機能項目に近づく文法化の一例である。アフリカーンス語は、再述所有代名詞構文の文法化を著しく進行させたゲルマン語と言える。

## 12. 属格の衰退と所有格構文・再述所有代名詞構文の発達

「A の B」を意味するドイツ語の「B+属格 A」の属格 A は、B の修飾語 (modifier) であり、統語的には B の一部にすぎない。一方、所有格 -'s/-s の再分析としての所有格構文または「-'s/-s 構文」、ノルウェー語の「A + *sin* + B」による再述所有代名詞構文または「*sin* 構文」、そして、その再分析としてのアフリカーンス語の「se 構文」に見られる [A + -'s/-s/*sin/se*] + B では、[A + -'s/-s/*sin/se*] は B の限定成分である。つまり、[A + -'s/-s/*sin/se*] + B は「限定詞句」(DP, determiner phrase) を形成している。これは定冠詞などの限定詞 (D, determiner) を主要部 (head) とし、名詞句 (NP, noun phrase)

<sup>26</sup> Den Besten (2012) は、「se 構文」の発達をオランダ語と南アフリカ領内の 3 つの基層言語 (Pasar Malay, Asian Creole Portuguese, Khoekoe) との融合に求めている。

よりも統語的に上位の単位である（本稿の他の箇所では、便宜的に「名詞句」という伝統的名称を用いる）。

ドイツ語の[[**der**]D Hut]DP' ]DP「その帽子」では、定冠詞 *der* が限定詞として全体を *der*「それ」で代表する。一方、英語の *'s* やアフリカーンス語の *se* (→ *s'n*) は、定冠詞 *the/die* と共起せず、定冠詞と同じ限定詞の位置を占め、英 *John's car* ([Jon [[**'s**]D car]DP' ]DP) → *John's*「ジョンのもの」、77 *Jan se kar* ([Jan [[**se**]D kar] DP' ]DP) → *Jan s'n*「ヤンのもの」のように、指定部 (Spec, specifier) を占める *John/Jan* を伴って全体を代表する。ノルウェー語の [Jon [[**sin**]D bil]DP' ]DP「ユーン的車」も、限定詞 *sin* が指定部の *Jon* を伴って、*Jon sin*「ユーンのもの」で代表する。

「*'s/s* 構文」の *'s/s* は、定冠詞と同じ限定詞句の中核である主要部に成長し、「*sin/se* 構文」の *sin/se* と肩を並べている<sup>27</sup>。属格の衰退と定冠詞の発達が進行した中世後期のゲルマン諸語は、名詞句に後置する前置詞句以外に、所有を中心とする名詞句間の意味的關係を示し、定の意味を表す手段を模索していた。そして、名詞句に前置し、歯茎摩擦音 *s* が共通の2つの構文を発達させたのである。出所は別でも、行き先は似通っていたと言える。

### 13. 英語の *his-* 属格と所有格構文・再述所有代名詞構文の關係

ここで、英語の *his-* 属格 (*his-genitive*) といわゆる所有格 *'s*、それに再述所有代名詞構文の關係について、歴史言語学的に考察してみよう。*his-* 属格 (英 *for Jesus his sake* イエスのために) は、*his* が *h-* の音価を失うなどして音韻的に弱化し、格変化が衰退した15~17世紀を中心に、女性形や複数形に一般化されて、性・数・格と無關係に18世紀半ばまで使われた再述所有代名

<sup>27</sup> 名詞との結びつきが強い記述属格 (*descriptive genitive*) は修飾語であり、限定詞と共に共起する。これには特性の属格 (*genitive of characteristic*, 英 *the renowned women's college* 著名な女子大学)、度量の属格 (*genitive of measure*, 英 *a five minutes' walk* 5分間の徒歩) などが含まれる。Norde (1997: 74-77) 参照。



詞構文である。(46)の最後の例のように、群属格の用法もあった。

- (46) 中英 *my moder ys* sake 私の母のために (Janda 1980: 249)  
*Margaret ys* doughter マーガレットの娘 (ib. 249)  
*her Grace is* requeste 閣下夫人のご要請 (ib. 249)  
*Wincestre his* toun ウィンチェスターの町<sup>28</sup> (ib. 249)  
 英 *Edward the Second of England his* queen イギリス王エド  
 ワード2世の王妃 (Weerman/De Wit 1998: 34)

英語のいわゆる所有格 *-s* は、この *his* が音韻的弱化 (*his* > *ys/is* > *-s*) によって、属格語尾 *-s* と混交し、これを吸収した結果とみなす説が古くから唱えられている (プルンナー 1973: 418)。英語のいわゆる所有格 *-s* が [ɪz, əz] という異形態を保持している事実も、ここから説明されるという (Janda 1980: 249)。近年、この説は Janda (1980) を始め、Weerman/De Wit (1998: 33-35) (1999: 1174-1176), Norde (1997: 90) などに支持されている。その妥当性を認めれば、英語のいわゆる所有格 *-s* はアフリカーンス語の「*se* 構文」と同様に、属格のなごりを吸収した再述所有代名詞構文からの発達と言える。

これは、第11節で述べたオランダ語のデフォルト形 *se* や、中期オランダ語の女性名詞に用いた *zyn/zine* とも共通点がある。ただし、Weerman/De Witt (1998: 34f.) (1999: 1176f.) が述べているように、英語の *his* の弱形と *-s* との関係とは違って、オランダ語では、再述所有代名詞 *z'n* と属格語尾 *-s* は明らかに別の音形なので、混交しなかった<sup>29</sup>。第9章(37)に挙げた西フリ

<sup>28</sup> 以上の4例はいずれも15世紀後半の用例。

<sup>29</sup> “Terwijl er in het Nederlands dus een duidelijk contrast is tussen [s] en [z'n] (of eventueel [se]), vallen in het Engels de van oorsprong verschillende klanken samen.” (Weerman/De Wit 1998: 34); “The difference between English and Dutch came about as a result of the fact that *his* is phonologically very much like 's, whereas *z'n* and *-s* are clearly two distinctive sounds in Dutch.” (Weerman/De Wit 1999: 1174) なお、オランダ語のいわゆる所有格 *-s* の群属格の用法には、英語よりも制限が強く、再述所有代名詞構文「A + *z'n* + B」を援用する傾向がある。たとえば、*-s* は並列項を含む名詞句には使用可能だ

ジア語の *syn* と *-s* の併存についても、同様である。Norde (1997: 89-92) も、スウェーデン語には再述所有代名詞構文は現代の標準語にも古語にも存在せず、かつての属格語尾 *-s* と *s/-z-* を語頭音とする再述所有代名詞は別々の発達であり、属格語尾由来の *-s* が再述所有代名詞との混交につねに由来するわけではないと述べている。第 10 節で言及したノルウェー語でも、「A + *sin* + B」構文と「A-*s* + B」構文は独立の起源にさかのぼる。以上の事例に照らせば、ゲルマン諸語の再述所有代名詞構文といわゆる所有格構文は別々の発達であり、英語のように両者が音韻的に重なった場合に限って、混交が起こったとみなすのが適切である。

この点との関連で、ノルウェー語の再述所有代名詞構文「A + *sin* + B」と属格由来のいわゆる所有格構文「A-*s* + B」の併存について補説しよう。ノルウェー語の「A-*s* + B」構文はスウェーデン語よりも使用範囲が広く、群属格 (27)①~③のすべての用法が可能である。ブックモールを例にとると、①前置詞句を伴う名詞句、②並列項を含む名詞句は書き言葉でも許される (Vinje 1987<sup>4</sup>: 201f.)。話し言葉では、③関係文を伴う名詞句も見られる。つまり、「A-*s* + B」構文の用法は第 10 節 (39) の「A + *sin* + B」構文に対応している。

- (47) ブ ① *Kongen av Danmarks rike* デンマーク (の *av*) 王の (-*s*) 国 (rike) (Vinje 1987<sup>4</sup>: 202)  
*Hvem i all verdens hatt* er det som ligger der? あそこに (det) 置いてある (som 関係詞 + *ligger*) それは (det) [いったいだれ (*vem* だれ + *i all verden* いったい)] の (-*s*) 帽子 (*hatt*) ですか (*er*) (ib. 204)  
*den gamle mannen med skjeggets* hus [髭を生やした (*med skjegget*) 老人 (*den gamle mannen*)] の (-*s*) 家 (*hus*)

---

が (オ *Jan en Piets* vader ヤンとピートの父, Booij 2010: 218 変更), 前置詞句を含む名詞句には許されず, 再述所有代名詞構文を用いる (オ *de koning van [\*Engeland's/Engeland z'n (= zijn)] kroon* 英国王の王冠, ib. 219 変更)。

( = (39)① *den gamle mannen med skjegget sitt* hus)

(Norde 1997: 92)

② *Adam og Evas* etterkommere [アダムと (og) エヴァ] の (-s) 子孫 (etterkommere) (Vinje 1987<sup>4</sup>: 202)

*to år og tre måneders* fravær [2年 (to år) と (og) 3か月 (tre måneder)] の (-s) 不在 (fravær) (ib. 202)

③ *mannen som feier pipas* hustru [パイプを (pipa) 手入れしている (som 関係詞 + feier) 男性 (mannen)] の (-s) 妻 (hustru) (ib. 204)

*De menn jeg er på kontor med's* koner kan ikke fordra meg. [私が<sup>s</sup> (jeg) オフィスで (på kontor) いっしょにいる (ゼロ : 関係詞 ~er~med) 男性たち (de menn)] の (-s) 奥さんたちは (koner), 私のことが<sup>s</sup> (meg) 気に入らない (kan ikke fordra) (ib. 204)

話し言葉では、「A-s+B」構文で独立用法 A-s「Aのもの」も観察される。

(48) プ Er det din sykkel? – Nei, det er *en gutt jeg kjenners*. それは (det) 君の自転車 (din sykkel) かい (er) –いや (nei), それは (det) [ほくが<sup>s</sup> (jeg) 知っている (ゼロ : 関係詞 ~kjenner) 男の子 (en gutt)] のもの (-s) だよ (er) (Vinje 1987<sup>4</sup>: 204)

この表現も再述所有代名詞構文「A + sin + B」の A sin「Aのもの」と併存している。(49)は疑問詞 hvem「だれ」が分離した表現で、(40)に対応する。

(49) プ *Hvem* er {det da's/det da *sin*}? あれは (det da) だれ (hvem) のもの (-s/sin (= (40))) ですか (er) (Vinje 1987<sup>4</sup>: 204)

ただし、A が -s で終わると、子音 [s] の連続による不明確さを避けて、前接語 -s を用いた SAS' (← SASs) よりも再述所有代名詞 sin が好まれる。

- (50) プ *Carlzon i SAS sin* kampanje SAS の (i SAS) カールソン (Jan Carlzon 1941- スウェーデン人実業家) の (sin) 会社 (kampanje) (Vinje 1987<sup>4</sup>: 202)

第 10 節(38) で挙げた地図のように、いわゆる所有格構文「A-s+B」は南部で好まれ、再述所有代名詞構文「A+sin+B」が優勢な西部と北部ではあまり用いない。ただし、方言差が激しく、標準語の規範が緩やかなノルウェー語では、方言差が話し言葉に色濃く反映している。英語の his- 属格と所有格由来の -s に相当するノルウェー語の 2 つの構文は、併存し、競合しているが、再述所有代名詞 sin/si/sitt/sine と所有格由来の -s の明確な音韻的相違のために、英語と違って、両者の混交には至らなかったと言える。

#### 14. 西・北フリジア語の弱変化属格 -e/-en と西フリジア語の複数属格 -ene

これまでに取り上げた子音 s を含む前接語は、女性を除く強変化名詞単数の強変化属格 (strong genitive) からの再分析による。ただし、属格由来の関連要素はこれだけにとどまらない。

まず、弱変化名詞の弱変化属格 (weak genitive) からの再分析が挙げられる。西フリジア語の「無冠詞配偶者・親族名称+e」(<\*-en, 西フ Durke Klaske デュルク (Durk) の妻クラスケ, heite hoed 父 (heit) の帽子) は、その一例である (清水 2006 : 118)。

北フリジア語フェリング方言にも、父称 (patronymic) を表す弱変化属格由来の -en がある。これは「強弱格の原則」(trochaic principle) に従って、「強音節+弱音節」の強弱格 (trochee) に収まる場合に用い、e [ə] などを含む無アクセント音節で終わる語は、強変化属格 -s を用いて強弱弱格 (dactyl)

を回避する<sup>30</sup>。

- (51) フェリ Iark {Jan**en**/Martii**en**} ヤン (Jan)/マルティーン (Martiin, -tiin  
にアクセント) の息子イアルク (Hoekstra 2018: 44 変更)  
Ook {Tjidels/Faaltings} {チイデル (Tjidel)/ファールティング  
(Faalting)} の息子オーク (ib. 44 変更)

弱変化属格由来の -e はオランダ語諸方言にもあり、やはり強弱格の原則に従って、強変化属格由来の -s と棲み分けている (Piete ピート (Piet) の ↔ Trienes トリーネ (Triene) の, Van Haeringen 1962<sup>2</sup>(1947b): 221)。こうした弱変化属格由来の要素は、屈折範疇から音韻的相補分布への予期せぬ転用、つまり外適用 (exaptation, Lass 1990) を経て生き残ったと言える。

強弱格の原則は、関連言語の他の現象にも反映している。標準オランダ語の複数形語尾 -en/-s の選択は、その一例である (オ boek**en**/dier**en** ← boek 本/dier 動物 ↔ daders/taxi**s** ← dader 犯罪者/taxi タクシー)。語尾 -s は起源が古いが、強弱格の原則が強まるにつれて、語尾 -en と競合すると、これに代わって用いられるようになった。たとえば、オランダ語の複数形 tafel**en**/artikel**en** (← tafel テーブル、一覧表/artikel 記事、論文、-ti にアクセント) は書き言葉的で正式であるのに対して、tafel**s**/artikel**s** は比較的新しく、話し言葉的な印象を与える (Van Haeringen 1962<sup>2</sup> (1947a))<sup>31</sup>。

次に、複数属格 (genitive plural) に由来する例として、西フリジア語の文語的表現で一部の人間名詞に用いる弱変化複数属格 -ene (西フ Frieze**ne** frij-

<sup>30</sup> 「強音節 + 弱音節」でも弱音節が鳴音 (sonorant) 以外の子音で終わる語には、語尾 -en を付加する (フェリ Hener**ken** ← Henerk ヘネルク, Aarest**en** ← Aarest アーレスト)。Hoekstra (2018: 45) によれば、聞こえ度 (sonority) が高まる子音連続 (-ks/-ts) を回避する「聞こえ度の原則」(sonority principle) が優先されることによる。

<sup>31</sup> 「強音節 + 弱音節」でも接尾辞 -ling を伴う語には、語尾 -en を付加する (オ peiling**en**/vreemdeling**en** ← peiling 測定/vreemdeling よそ者)。西フリジア語では語尾 -s/-en を併用する例が多いが (西フ peiling**s** ~ peiling**en**/frjemdlings ~ frjemding**en** ← peiling/frjemdling 同上)、語尾 -en はオランダ語の影響による (清水 2006: 109)。

heid フリジア人 (Fries) の自由) が挙げられる (清水 2006: 118)。

なお、ドイツ語で都市名などの地名を形容詞化する無変化の接尾辞 -er 「～の」も、名詞派生接尾辞 -er 「～の人」の複数属格からの転用である (ド Köln**er** Dom ケルン大聖堂 (Kö**lner** ケルンの < der Kö**lner** ケルン (Kö**ln**) の人々の), Motsch 2004<sup>2</sup>: 218)。これには、Tokio-**t-er**/Ameriká-**n-er**/Hannover-**án-er** (← Tokio/Amérika/Hannó**ver** ハノーファー, 「<sup>ˈ</sup>」はアクセント位置) のような異形態 -ter/-ner/-aner も含まれる。

## 15. 属格由来要素による多重表示とフェーロー語の前接語 -sa

2種類の属格語尾の重複に由来する二重表示の例もある。Van Haeringen (1962<sup>2</sup>(1947b): 211) によれば、オランダ南ホラント州南東部のライン・マース河口地域に位置する島のエイセルモンデ方言 (オ IJsselmonds) と干拓地のアルブラセルヴァールト方言 (オ Alblasserwaaards) には、「強変化属格 -s + 弱変化属格 -e」を合わせた「無冠詞人名・親族名称 + -ze」が観察される (Ik heb Annaz**e** man gesproken. 私は (ik) アンナ (アナ Anna 女名) の (-ze) 夫に (man) 面会した (heb ~ gesproken), Zet Ariez**e** pet maar op. アーリ (Arie 男名) の (-ze) 帽子を (pet) かぶってよ (zet ~ maar op), ib. 211)。

属格由来要素による多重表示の例として、北ゲルマン語からはフェーロー語の前接語 -sa が挙げられる。同言語の属格の衰退との関連で説明しよう。

フェーロー語には、属格支配の動詞と形容詞は残っていない。属格支配の前置詞も、第8節 (33) に示したように、対格支配に大きく移行している。所有表現でも、後述するように、人称代名詞を除いて属格修飾語は固定表現と慣用句に限られる。Petersen/Szczepaniak (2018: 123) も近年の一連のフェーロー語文法記述に照らして、属格は「ほとんど完全に消滅している」 (“almost completely extinct”, ib. 123) と述べている。

フェーロー語の属格の衰退は、19世紀以前にさかのぼるとも推定されている (Petersen/Szczepaniak 2018: 123)。フェーロー語復興運動に絶大な影響を与えたハンメシユハイム (Venceslaus Ulricus Hammershaimb 1819-1909)

の『フェーロー語選集 I』(『*Færøsk anthologi I* 1891)には、次のように記されている<sup>32</sup>。

- (52) “Ejeform forekommer iøvrigt udenfor sammensætninger sjældnen i daglig tale og erstattes almindelig ved forholdsord (*av, í, á*, men helst *hjá*)”. (Hammershaimb 1891: LXXI)

「属格は、ちなみに、複合語以外に日常言語では稀にしか現れず、普通は前置詞 (*av, í, á*, ただし、最も一般的には *hjá*) で代替される」

同書の語形変化表には属格の記載に揺れがある。大部分の名詞複数属格と形容詞強変化単・複数属格は括弧に入れてあり、代名詞は語によって性・数も含めて括弧の有無が一定せず、属格を欠く語もある。男性の変化形を挙げよう (7<sub>E</sub> *drongur* 男の子 (強変化名詞, ib. LXXVI), *spakur* 温和・利口な (形容詞強変化, ib. LXXXIV), *hin* かの, 別の (指示代名詞, ib. XCI))。

(53)	単数/複数	単数/複数	単数/複数
7 <sub>E</sub> 主格	<i>drongur/dreingir</i>	<i>spakur/spakir</i>	<i>hin/hinir</i>
対格	<i>drong/dreingir</i>	<i>spakan/spakar</i>	<i>hin/hinar</i>
与格	<i>dreingi, drongi/dreingjum</i>	<i>spökum, -un/spökum, -un</i>	<i>hinum/hinum</i>
属格	<i>drongs/(dreingja)</i>	<i>(spaks/spakra)</i>	<i>(hins/なし<sup>33</sup>)</i>

名詞の属格単数形の収録例には、たとえば次のことわざがある。古ノルド語の所有表現「A の B」では、一般に「B + A 属格」のように所有者 A が被所有者 B に後続する。一方、フェーロー語の復興を目指した近代的な表現では、「A 属格 + B」のように先行することが多い (Barnes/Weyhe 1994: 207)。

<sup>32</sup> 同書には、1854 年刊行のフェーロー語文法記述が含まれている。

<sup>33</sup> 原典では “mangler” 「欠けている」と記されている。

- (54) ㄱ Bleytt er *barnsins hjarta*. 子供の (barnsins 属格: barn + -ins 後置定冠詞 ← barnið 主格: barn + -ið) 心は (hjarta) 感じやすい (bleytt er) (Hammershaimb 1891: 315)
- Lítill er *barnsins uggi*. 子供をあやすにはそれほど手間はかからない (= 子供の (barnsins, 同上) あやしは (uggi) わずかである (lítill er)) (ib. 315)

2 番目の例はことわざとして現在でも残っているが、現代フェーロー語では、名詞の属格は通常の所有表現には使えない。たとえば、\*Ólavs bilur「オーラヴル (Ólavur) の車」(強変化男性属格 -s), \*abba hús「祖父 (abbi) の家」(弱変化男性属格 -a) とは言えない (Thráinsson et al. 2004: 249)。

Petersen/Szczepaniak (2018: 127) は Barnes (1978 筆者未見) の記述を紹介して、1890～1970 年に書かれたフェーロー語のテキストやバラード作品では、属格修飾語は古風ではないが、典型的には名詞に前置し、kong-*s*-in-*s*「その王の」のように名詞と定冠詞が属格になるのではなく、kongjins land「その王の国」のように後置定冠詞だけに -s が付加されると述べている。これは第 4, 6 節で述べたスウェーデン語の前接語 -s による群属格を想起させ、屈折範疇としての属格の衰退を示唆している。

ただし、ハンメシュハイムの『フェーロー語選集 I』(1891: LXXXIX, XC) では、人称代名詞の属格形には 3 人称中性単数を除いて括弧をつけず、正規の語形としている<sup>34</sup>。次表では、現代語と同一の語形を下線で示す。

(55)

	単数: 1 人称	2 人称	3 人称: 男性	女性	中性
ㄱ 主格	<u>eg</u>	<u>tú</u>	<u>hann</u>	<u>hon</u>	<u>tað</u>

<sup>34</sup> 3 人称代名詞中性形は指示代名詞と同形である。同書でも、「3 人称には指示代名詞 tann の単数形と複数形が借用されている」(“For tredje person lånes ik. og flt. af det påpegende stedord *tann*.”, ib. LXXXIX) と記されている。



対格	<u>meg</u>	<u>teg</u>	<u>hann</u>	<u>hana</u>	<u>tað</u>
与格	<u>mær</u>	<u>tær</u>	<u>honum</u> , -un	<u>henni</u>	<u>tí</u>
属格	<u>mín</u>	<u>tín</u>	hans, <u>hansara</u>	hennar, <u>hennara</u>	(tess)

複数：1 人称		2 人称	3 人称：男性	女性	中性
主格	vær <sup>35</sup> , <u>vit</u>	tær, <u>tit</u>	<u>teir</u>	<u>tær</u>	<u>tey</u>
対格	os(s) <u>okkum</u> , -un <sup>36</sup>	<u>tykkum</u> , -un	<u>teir</u> (tá)	<u>tær</u>	<u>tey</u>
与格	osum, <u>okkum</u> , -un	<u>tykkum</u> , -un		teim, <u>teimum</u> <sup>37</sup>	
属格	osara, <u>okkara</u>	<u>tykkara</u>		<u>teirra</u>	

現代フェーロー語の所有表現には、1・2 人称単数は無変化の人称代名詞属格 *mín* (ド *meiner*), *tín* (ド *deiner*) ではなく、形容詞強変化と同一変化の所有代名詞 (所有形容詞) *mín/mínir* 「私の」、*tín/tínir* 「君・あなたの」(男性単/複数主格) を用いる。所有代名詞 3 人称再帰形 *sín/sínir* 「自分の」(ア *sinn/sínir*) も、形容詞強変化と同一変化である。一方、その他の人称代名詞属格 *okkara* 「私たちの」/*tykkara* 「君たち・あなたがたの」/(*tygara* あなたの (敬称, 使用稀)<sup>38</sup>)/*hansara* 「彼の」/*hennara* 「彼女の」/*teirra* 「彼 (女)・それらの」は、所有表現に使用できる<sup>39</sup>。

<sup>35</sup> *vær* - *os(s)* - *osum* - *osara* は本来の複数形だが、アイスランド語と同様に、現代フェーロー語では、双数形に由来する *vit* - *okkum* - *okkum* - *okkara* を複数形に用いる ( $\text{f}\ddot{\text{e}}\text{v}\ddot{\text{a}}\text{r} \leftrightarrow \text{vit} \sim \text{A} \text{v}\ddot{\text{e}}\text{r} \leftrightarrow \text{vi}\ddot{\text{ð}}$ )。複数形由来の *tær* と双数形由来の *tit* の関係も同様 ( $\text{f}\ddot{\text{e}}\text{t}\ddot{\text{a}}\text{r} \leftrightarrow \text{tit} \sim \text{A} \text{þ}\ddot{\text{e}}\text{r} \leftrightarrow \text{þi}\ddot{\text{ð}}$ )。

<sup>36</sup> -un の語尾は、現代語では -um (*okkum*, *tykkum*, *honum*) とつづるが、これは古ノルド語を意識した擬古的な正書法であり、発音は [un] である。

<sup>37</sup> *teimum* は現代語では *teimum* とつづるが、やはり発音は -um [un] である。

<sup>38</sup> この語形は同書 LXXXIX ページの人称代名詞の変化表とは別に、XC ページの解説中に記載されている。

<sup>39</sup> 「A の B」を表す語順には「B+A (所有代名詞・人称代名詞属格)」と「A (同左)+B」があるが、使い分けは類書で記述が異なる。Petersen (2016 : 112f.) は、話し言葉では「A+親族名称以外 B」 $\leftrightarrow$ 「親族名称 B+A」を区別し、書き言葉では両方の語順を用いるとしている。Thráinsson et al (2004 : 118) は、Barnes/Weyhe (1994 : 208) と同じ

- (56) 7<sub>±</sub> *hennara* bilur bilur *hennara* 彼女の車  
*hansara* bók bók *hansara* 彼の本

(Thráinsson et al. 2004: 118)

*okkara* bátur pápi *okkara* 私たちのボート 私たちの父

(Petersen 2016: 114, 入江 2005: 160)

格変化を失った英語など一連の言語でも、人称代名詞は主格と目的格を区別する。属格の保持は、代表的な機能語である人称代名詞の特徴と言えよう。

名詞句での所有表現には、第 8 節 (34) (35) に挙げた親族関係に用いる所有の対格以外に、前置詞句がある。前置詞句表現は、所有表現で最も使用頻度が高いが、前置詞の種類が多く、使い分けが複雑である<sup>40</sup>。所有者が人間の場合に最も一般的なのは、「前置詞 *hjá* 「～のもと・家で」 (< *hús* 家) + 与格」であり ((52) 参照)、事物の所有にも用いる。親族関係には、「前置詞 *til* (ド *Ziel* 「目的」と同源)/*at* (英 *at*) + 対格」が好まれる。譲渡不可能所有一般には、「前置詞 *á* (英 *on*, ド *an*)/*i* (英・ド *in*) + 与格」を用いる<sup>41</sup>。

- (57) 7<sub>±</sub> ① pápin *hjá dronginum* (与格: *drongi* + -(i)num 後置定冠詞 ← *drongur* + *-in* 主格) – pápi *dreingin*<sup>42</sup> (所有の対格 (34) :

---

く、一般的な語順 (“default order”) は「B+A」であると述べた上で、「A+B」は所有者の対比を明示する場合に用いるとしている。この区別はアイスランド語に似ている。Lockwood (1977<sup>3</sup>: 116) もこれを同様だが、形容詞修飾語を伴うと「A+形容詞+B」になると記している (7<sub>±</sub> *har endaði hann sínar sínastu dagar* そこで (*har*) 彼は (*hann*) 自分の (*sínar*) 最後の日々を (*sínastu dagar*) 終えた (*endaði*, *ib.* 116)。Barnes/Weyhe (1994: 208) は *mín nýggi bátur/nýggi bátur mín* 「私の (*mín*) 新しいボート (*nýggi bátur*)」の語順がともに普通で、所有者 *mín* 「私の」を強調する場合に *mín nýggi bátur* の語順を用いるとしている。

<sup>40</sup> 所有表現に用いる前置詞は、西ゲルマン語の多くではかなり特定化されているが (例: 英 *of*/ド *von*/オ *van*/西 *7 fan*)、一般に北ゲルマン語では種類が多い (例: ス *av/för/hos/på/till*) (Braunmüller 2018: 313)。

<sup>41</sup> 親族関係には *til* を多用する (Thráinsson et al. 2004: 251)。

<sup>42</sup> 与格 *drongi/dreingi*, 対格 *drong/dreing* は主格 *drongur* 「男の子」の異形態。

dreing + -in) その男の子の父 (pápi/pápin ← pápi + -(i)n 後置定冠詞) (Thráinsson et al. 2004: 63, 入江 2005 : 160f.)

bókin **hjá Jákupí** ヨアクプ (男名与格← Jákup 主格) の本 (bókin) (Lockwood 1977<sup>3</sup>: 106)

② beiggi **til drongin** (対格: drong + -in) – beiggi **drongin** (所有の対格 (34) : drong + -in) その男の子の兄弟 (beiggi)

(Thráinsson et al. 2004: 252)

③ abbi **at dreinginum** (与格: dreingi + -(i)num 後置定冠詞) – abbi **drongin** (所有の対格 (34)) その男の子の祖父 (abbi)

(Petersen 2016: 111)

④ hárið **á gentuni** その女の子 (与格: gentu + -(i)ni 後置定冠詞) の髪 (hárið) (ib. 112)

さらに、フェーロー語の話し言葉には、「[人名・親族名称 (ペットの動物も含む) + -sa] + 名詞」による所有表現がある<sup>43</sup>。この -sa は、強変化男性名詞には主格または対格 (= 子音で終わる語幹, Lockwood 1977<sup>3</sup>: 106), 弱変化男・女性名詞には斜格 (= 対・与格) に付加される。無変化の名詞や略語には、そのまま付加される。

(58) フェ ① {**Ólavursa/Ólavsa**} bilur {オウラヴル (強変化男名 Ólavur の主/対格 = 語幹) の (-sa) 車 (bilur)}

(Petersen 2016: 106, Thráinsson et al. 2004: 249f.)

**Beintusa** súkkla バインタ (弱変化女名 Beinta の斜格) の (-sa) 自転車 (súkkla) (Thráinsson et al. 2004: 64)

② **Ólavur á Heyggisa** hús [ヘッグルの (与格支配の前置詞 á (英 on/ス på) + 地名 Heyggur の与格) オウラヴル] の (-sa)

<sup>43</sup> 入江 (2005) は「新しい属格形」とみなして、「SA 所有格」と呼んでいる。本稿では、以下に述べるように屈折範疇としての格とはみなさず、「前接語 -sa」とする。

家 ↔ \**Ólavsa á Heyggi* hús 同上 (ib. 250)

*systir mín sa* vegna<sup>44</sup> [私の (mín) 姉妹 (systir) : 主格] の (-sa) ゆえに (vegna) (ib. 251)

③ *Beintu og Róasa* bók [バインタ (弱変化女名 Beinta の斜格) とロウイ (弱変化男名 Rói の斜格)] の (-sa) 本 (bók)

↔{\**Beinta og Róasa*/\**Beinta og Róisa*/\**Beintusa og Róasa*} bók 同上 (ib. 64f.)

比較: *Beintusa og Róasa* hús [バインタの (-sa) 家 (hús)] と [ロウイの (-sa) 家] (Petersen 2016: 107)

この -sa は、種々の格形、群属格を特徴づける前置詞句を含む名詞句、名詞句の並列の末尾に付加される。したがって、Thráinsson et al. (2004: 251) も指摘するように、英語や大陸北ゲルマン語の -'s/-s/sin と同類の前接語である。もちろん、アフリカーンス語の se も含まれる。

前接語 -sa は人名・親族名称 (ペットの動物を含む) 以外には、通常は用いない (7<sub>E</sub> \**húsiðsa* tak その家 (hús + -ið 後置定冠詞) の屋根, \**Tórshavnsa* býráð トウシュハウン (Tórshavn 町名) の市議会, Thráinsson et al. 2004: 64)。ただし、最近の話し言葉では、団体・組織を表す固有名詞、定の有生 (= 人間) 名詞にも用法を広げつつある<sup>45</sup>。

(59) 7<sub>E</sub> Hetta var í *Hotell Hafnia-sa* tíð. これは (hetta) ホテル・ハフニア (Hotell Hafnia) の (-sa) 時代 (tíð) での (i) ことだった (var) (Petersen 2016: 107, Thráinsson et al. 2004: 64)

<sup>44</sup> 第8節で述べたように、vegna 「～ゆえに」は属格支配から対格支配に移行した前置詞だが、「名詞句+vegna」の語順で後置詞として用いた場合には、かつての名詞としての性格がある程度まで保たれていると考えられる。注14で述べたドイツ語の wegen の用法を参照。

<sup>45</sup> 入江 (2005: 159) によれば、Hjalmar P. Petersen 氏からの私信として、最近では地名に用いる例 (7<sub>E</sub> *New Yorksa* taksabilar ニューヨークのタクシー) もある。

Tað er **SEV-sa** ábyrgd at fáa sum mest burturúr. そこから (burturúr) できるだけ多く (の利益) を (sum mest) 獲得することは (tað er (英 it is) ~at fáa (英 to get)) SEV (= 電力会社名) の (-sa) 責任 (ábyrgd) だ (er) (Petersen 2016: 120)

Har er radarin. Tað sigur abbi er **sjómaðurin-sa** besti vinur. そこに (har) そのレーダーが (radarin) ある (er)。それは (tað) 船乗り (sjómaðurin ← sjómaður + -in 後置定冠詞・主格) の (-sa) 最良の友 (besti vinur) であると (er) 祖父は (abbi) 言っている (sigur) (ib. 121)

Hví gert tú tað so ikki fyri **børnini-sa** skyld? なぜ (hví) 君は (tú) 子供たち (børnini ← børn + -ini 定冠詞・対格) の (-sa) ために (fyri~skyld 対格← skyld 主格, 責任) そう (tað so) しないのか (gert~ikki)<sup>46</sup> (ib. 121)

-sa の最古の用例は、18 世紀半ばの風刺バラード (Føi táttur) に現れる **Jákupsa** skegg 「ヨアクプ (Jákup 男名) の (-sa) 髭 (skegg)」であるという (Petersen 2016: 116)。Petersen (2016: 113-118) は、-sa の起源をかつての代表的な強変化名詞の単数属格語尾 -s に複数属格語尾 -a を添えて、所有者を音韻的に際立たせた効果に求めている<sup>47</sup>。同様に、-ra で終わる人称代名詞属格 okkara 「私たちの」/tykkara 「君たち・あなたがたの」/(tygara 「あなたの (敬称, 使用稀)」) は、アイスランド語の対応語 okkar/ykkar/yðar のように古くは -r で終わっていたが、属格であることを明確にするために、複数属

<sup>46</sup> この例はデンマーク語の for + 名詞句 -s + skyld 「~のために」の影響を受けていると考えられる (Petersen 2016: 124-126)。

<sup>47</sup> Haberland (1994: 325) によれば、通常は形容詞と記述されるデンマーク語の fædrene 「祖先の, 父方の」も複数属格 (< fader 父) の転用である。mine fædrene hus 'my (fore) fathers' house' (ib. 325) では、mine fædrene 「私の祖先の」を形容詞として解釈することはできない。fædrenearv 「先祖代々の遺産」/fædrenegård 「先祖伝来の農場」/fædrenejord 「先祖伝来の土地」、mødrene 「母方の」(< moder 母) も同様。

格に共通の語尾で所有の意味があったと考えられる -a を加えて成立した。これは、-a で終わる通常の名詞の複数属格や *teirra* 「彼(女)・それらの」(ア *beirra*) への類推による。当時すでに、-r で終わる人称代名詞属格は、属格として意識されにくくなっていたと考えられる。

かつてフェーロー語には、アイスランド語に残る属格形 *hans* 「彼の」に -a を加えた *hansa* の語形があり、*hennar* 「彼女の」> *hennara* という変化との類推から *hansa* > *hansara* となって、(55)(56) に挙げた現代語の人称代名詞属格形が成立した。これを契機として、-s を属格の目印としていた名詞もさらに -a を伴うようになった。そして、*Jákups.a* > *Jákup.sa* という音節境界 (.) の移動に伴う形態素境界の再分析が起こった。Petersen (2016: 117) の推定では、以上の3段階を経て前接語 -sa が誕生した。私見では、この再分析は、ノルウェー語の属格語尾由来の前接語 -s が先行語との間に休止を置き、後続語と続けて発音することがある事実を連想させる ((30) プ *NSB...s-nattog* er forsinka. NSB (=ノルウェー国鉄) の夜行列車は到着が遅れた)。

特筆を要するのは、最近の話し言葉での傾向として、前接語 -sa が -ra で終わる人称代名詞複数属格形にも広がりつつある点である。

(60) ㉔ {*okkarasa/tykkarasa*} bilur {私たちの (okkara 属格 + -sa)/君たち・あなたがたの (tykkara + -sa)} 車 (bilur)

(Petersen 2016: 113)

*teirrasa* börn 彼(女)らの (teirra 属格 + -sa) 子供たち (börn)

(Petersen/Adams 2009<sup>2</sup>: 249)

この *okkarasa/tykkarasa* という語形は、{*okkar/tykkar*} + -a + -sa という属格由来の要素の二重表示による。さらに -a + [-s + -a] のように分析すれば、三重表示によるとも言える<sup>48</sup>。おそらくこれは、*okkara/tykkara/(tygara)*

<sup>48</sup> 所有者の種類からは、「人称代名詞>固有名詞・親族名詞>人間名詞>その他の名詞」というシルヴァースティーンの名詞句階層 (Silverstein's hierarchy) が想起される (入江

/teirra の -ra が属格標識と意識されなくなったことの反映だろう。英語の our/your/their などの所有代名詞も、we/you/they の属格だったとは意識されていない。私見では、フェーロー語の属格は人称代名詞でも消滅しつつあると考えられる。

この事実はまた、第4節(20)に挙げたように、スウェーデン語の *deras* 「彼(女)ら・それらの」、デンマーク語とブークモールの *deres* 「同左」が、本来の属格形 *dera/dere* (ア *peirra*/ニユ *deira*) を代表的な強変化属格語尾に由来する前接語 -s で補強した二重表示である事実を想起させる。

## 16. 属格と所有表現をめぐる言語の発達サイクルとリサイクル —— 言語変化のエコロジー

形態表示による格変化の脱屈折化が進行した中世以降のゲルマン諸語は、屈折範疇としての属格の衰退に応じて、所有関係を中心とする名詞句間の新たな表現手段を求め続けた。その結果、前置詞句による語彙的手段と並んで、大多数のゲルマン諸語では属格語尾の前接語への脱文法化がなされ、西ゲルマン諸語とノルウェー語では再述所有代名詞構文の文法化も起こった。

一方、不要となった強・弱変化および複数属格の残存は他の目的に転用され、多重表示によって補強されることもあった。属格語尾の一部は語形成のレベルに再分析され、複合語の接合要素 (linking element/ド Fugenelement) としても命脈を保っている (ド *Arbeitslust* 労働 (Arbeit + -s) 意欲 (Lust), *Knabenchor* 少年 (Knabe + -n-) 合唱団 (Chor))。また、被限定名詞を欠く独立属格 (absolute genitive, Kruisinga 1932<sup>5</sup>: 53f, 64-66) は、家族名 (ド *Buddenbrooks* ブッデンプローク家の [人々], ス *Pettersons* ペッテション家の [人々]), 住居名 (英 at my uncle's 私の叔父の [家] で), 店舗名 (西 *by de bakkers* パン屋 (bakker) の [店] で, 清水 2006: 117), 会社名 (英 *Lloyd's* ロイズ [保険市場], ス *Norstedts* ノーシュテツ [出版社]) を表す構

---

2005)。

文になっている<sup>49</sup>。

属格の衰退と所有表現の発達をめぐる以上の事例は、ゲルマン諸語が「形容詞強変化・代名詞変化>形容詞弱変化>定冠詞>二重限定」の順に、名詞句に定 (definiteness) の形態表示を求め続けた限定表現の発達サイクルを想起させる (清水 (2018: 46))。ゲルマン諸語の属格と所有表現の変遷は、清水 (2018) (2019a) (2019c) で扱ったこのケースと同様に、言語の発達サイクルとリサイクルの好例であり、いわば「言語変化のエコロジー」(ecology of language change) の一環として位置づけられよう<sup>50</sup>。

## 参考文献

- Abraham, Werner (1997) The Interdependence of Case, Aspect and Referentiality in the History of German — The Case of the Verbal Genitive. In: Van Kemenade/ Nigel (eds.), 29–61.
- Abraham, Werner (2013<sup>3</sup>) *Deutsche Syntax im Sprachenvergleich*. Tübingen: Stauffenburg.
- Ackermann, Tanja/Simon, Horst J./Zimmer, Christian (eds.). (2018) *Germanic Genitives*. Amsterdam/Philadelphia: Benjamins.
- Admoni, Wladimir (1970<sup>3</sup>) *Der deutsche Sprachbau*. München: Beck.
- Åkerberg, Bengt (2012) *Ålvdalsk grammatik, under medverkan av Gunnar Nyström*. Ålvdalen: Ulum Dalska.
- Andersson, Erik (1994) Swedish. In: König/Van der Auwera (eds.), 271–312.
- Barnes, Michael (1978) Grammatical Instability in Faroese Ballads and Written Faroese. *Nordveg* 20. 209–235.
- Barnes, Michael P./Weyhe, Eivind (1994) Faroese. In: König/Van der Auwera (eds.),

<sup>49</sup> この独立属格は後続名詞の省略ではなく、構文として確立している。Kruisinga (1932<sup>3</sup>: 64) は、I have been spending a fortnight {*at my uncle's/at my uncle's villa*}。について、*at my uncle's* では、2週間、発話者が叔父の別荘に泊めてもらっているのに対して、*at my uncle's villa* では、叔父が発話者に別荘を貸している意味になり、明確に異なるとの確に述べている。ロンドンの保険市場 Lloyd's 「ロイズ」も、もはや17世紀末の喫茶店 Lloyd's Coffee House ではない。

<sup>50</sup> 言語の発達サイクルとリサイクルの概念については、Van Gelderen (2011), Booij (2010: 211ff.) 参照。



- 190-218.
- Behaghel, Otto/Taeger, Burkhard (Hrsg.) (1996<sup>10</sup>) *Heliand und Genesis. Althochdeutsche Textbibliothek. Nr. 4.* Tübingen: Niemeyer.
- Beilstein-Schauvelberger, Ann (2007<sup>7</sup>) *Züritütsch/Schweizerdeutsch — Ein Lehrmittel für Fremdsprachige.* Zürich: Grafischer Betrieb & Verlag.
- Besch, Werner /Knoop, Ulrich/Putschke, Wolfgang/Wiegand, Herbert Ernst (Hrsg.) (1983) *Dialektologie. Halbbd. 2. HSK Bd. 1.* Berlin/New York: De Gruyter.
- Blatz, Friedrich (1896<sup>3</sup>) *Neuhochdeutsche Grammatik mit Berücksichtigung der historischen Entwicklung der deutschen Sprache. Zweiter Band. Satzlehre (Syntax).* Karlsruhe: Lang. (1970 復刻 Tokyo: Sansyusya)
- Booij, Geert (2010) *Construction Morphology.* Oxford: Oxford University Press.
- Braunmüller, Kurt (2018) On the Role of Cases and Possession in Germanic. In: Ackermann et al. (eds.). 301-323.
- ブルンナー, K. (松浪 有/小野 茂/忍足欣四郎/秦 宏一 訳) (1973) 『英語發達史』大修館.
- Dal, Ingerid/Eroms, Werner (2014<sup>4</sup>) *Kurze deutsche Syntax auf historischer Grundlage.* Berlin/Boston: De Gruyter.
- De Villiers, Meyer (1987<sup>7</sup>) *Afrikaanse grammatika vir volwassenes.* Bloemfontein/Durban/Pretoria: Nasou Beperk.
- Den Besten, Hans (2012) The Origins of the Afrikaans Pre-nominal Possessive System(s). In: Van der Wouden, Ton (ed.) *Roots of Afrikaans — Selected Writings of Hans den Besten.* Amsterdam/Philadelphia: Benjamins. 7-23.
- Döhmer, Caroline (2018) A New Perspective on the Luxembourgish Genitive. In: Ackermann et al. (eds.). 15-36.
- Donaldson, Bruce C. (1993) *A Grammar of Afrikaans.* Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Donaldson, Bruce C. (2000) *Colloquial Afrikaans.* London/New York: Routledge.
- Duden (1998<sup>6</sup>) *Grammatik der deutschen Sprache.* Mannheim/Leipzig/Wien/Zürich: Dudenverlag.
- Duden (1999<sup>3</sup>) *Das große Wörterbuch der deutschen Sprache in 10 Bänden.* Mannheim/Leipzig/Wien/Zürich: Dudenverlag.
- Duden (2009<sup>6</sup>) *Die Grammatik.* Mannheim/Wien/Zürich: Dudenverlag.
- Duden (2016<sup>8</sup>) *Das Wörterbuch der sprachlichen Zweifelsfälle.* Berlin: Dudenverlag.
- Eisenberg, Peter (2013<sup>4</sup>) *Grundriss der deutschen Grammatik. Bd. 2. Der Satz.* Stuttgart/Weimar: Metzler.
- Endresen, Rolf Theil (1988<sup>3</sup>) Morfologi. In: Simonsen, Hanne Gram/Endresen, Rolf

- Theil/Hovdhaugen, Even. *Språkvitenskap — En elementær innføring*. Universitetsforlaget. 76-140.
- Faarlund, Jan Terje (2019) *The Syntax of Mainland Scandinavian*. Oxford: Oxford University Press.
- Fanselow, Gisbert/Felix, Sascha W. (Hrsg.) (1991) *Strukturen und Merkmale syntaktischer Kategorien*. Tübingen: Niemeyer.
- Ferraresi, Gisella (2014) *Grammatikalisierung*. Heidelberg: Winter.
- Fuß, Eric (2011) Eigennamen und adnominaler Genitiv im Deutschen. *Linguistische Berichte* 225. 19-42.
- Gallmann, Peter (1990) *Kategoriell komplexe Wortformen*. Tübingen: Niemeyer.
- Haberland, Hartmut (1994) Danish. In: Köning/Van der Auwera (eds.), 313-348.
- Hammershaimb, Venceslaus Ulricus (1891) *Færøsk anthologi. I Tekst samt historisk og grammatisk inledning*, København: S. L. Møllers Bogtrykkeri.
- Hamre, Håkon (1961) The Use of the Genitive in Modern Faroese. *Scandinavian Studies* 33. 231-246.
- 橋本文夫 (2006 (1956)) 『復刻版 詳解ドイツ大文法』三修社.
- Haugen, Einar (1982) *Scandinavian Language Structures — A Comparative Historical Survey*. Tübingen: Niemeyer.
- Haugen, Einar/Borin, Lars (2018<sup>3</sup>) Danish, Norwegian and Swedish. In: Comrie, Bernard (ed.) *The World's Major Languages*. London/New York: Routledge. 127-150.
- Hoekstra, Jarich (2018) Frisian Genitives — From Old Frisian to the Modern Dialects. In: Ackermann et al. (eds.) 37-61.
- Hoge, Kerstin (2018) Yiddish Possessives as a Case for Genitive Case. In: Ackermann et al. (eds.), 231-272.
- Holmes, Philip/Hincliffe, Ian (2013<sup>3</sup>) *Swedisch - A Comprehensive Grammar*. London: Routledge.
- 入江浩司 (2005) 「フェーロー語の属格とその代替表現の分布」『金沢大学文学部論集 言語・文学篇』第25号. 155-166.
- Jakobsen, Jakob (1984) *Sagnir og ævintýr I*. Tórshavn: PF. H. N. Jacobsens Bókahandil. (*Færøske folkesagn og æventyr 1898-1901* の復刻版).
- Janda, Richard D. (1980) On the Decline of Declensional Systems — The Overall Loss of OE Nominal Case Inflections and the ME Reanalysis of *-es* as *his*. In: Traugott, C. Elizabeth et al. (eds.). *Papers from the 4th International Conference on Historical Linguistics*. Amsterdam: Benjamins. 243-252.
- Jónsson, Jóhannes Gisli (2017) Avoiding Genitive in Icelandic. In: Thráinsson, Höskuldur/Heycock, Caroline/Petersen, Hjalmar P./Hansen, Zakaris Svabo (eds.). *Syntactic*

- Variation in Insular Scandinavian*. Amsterdam/Philadelphia: Benjamins. 141–163.
- Kirsten, Johanita (2019) *Written Afrikaans since Standardization — A Century of Change*. Lanham/Boulder/New York/London: Lexington Books.
- Kolvenbach, Monika (1973) Das Genitivobjekt im Deutschen — Seine Interrelationen zu Präpositionalphrasen und zum Akkusativ. In: *Festgabe für Paul Grebe zum 65. Geburtstag. Teil 2. Sprache der Gegenwart*. 24. Düsseldorf: Schwan. 123–134.
- König, Ekkehard/Van der Auwera, Johan (eds.) (1994) *The Germanic Languages*. London/New York: Routledge.
- Koß, Gerhard (1983) Realisierung von Kasusrelationen in den deutschen Dialekten. In: Besch et al. (Hrsg.). 1242–1250.
- Kress, Bruno (1982) *Isländische Grammatik*. Leipzig: VEB Verlag Enzyklopädie.
- Kruisinga, E. (1932<sup>5</sup>) *A Handbook of Present-Day English. Part II — English Accidence and Syntax 2*. Groningen: P. Noordhoff.
- Lass, Roger (1990) How to Do Things with Junk — Exaptation in Language Evolution. *Journal of Linguistics* 26: 79–102.
- Leiss, Elisabeth (1994) Die Entstehung des Artikels im Deutschen. *Sprachwissenschaft* 19. 307–319.
- Leiss, Elisabeth (2000) *Artikel und Aspekt — Die grammatischen Muster von Definitheit*. Berlin/New York: De Gruyter.
- Lindauer, Thomas (1995) *Genitivattribute*. Tübingen: Niemeyer.
- Lockwood, W. B. (1968) *Historical German Syntax*. Oxford: Clarendon Press.
- Lockwood, W. B. (1977<sup>3</sup>) *An Introduction to Modern Faroese*. Tórshavn: Føroya Skúlabólagrunnur.
- McDermott, Lydia (2005) *Teach Yourself Afrikaans*. London: Hodder & Stoughton.
- Motsch, Wolfgang (2004<sup>2</sup>) *Deutsche Wortbildung in Grundzügen*. Berlin/New York: De Gruyter.
- Norde, Muriel (1997) *The History of the Genitive in Swedish — A Case Study in Degrammaticalization*. Amsterdam: Faculteit der Letteren. Universiteit van Amsterdam.
- Norde, Muriel (2009) *Degrammaticalization*. Oxford: Oxford University Press.
- Næs, Olav (1979<sup>4</sup>) *Norsk grammatikk*. Oslo: Fabritius Forlag.
- Panzer, Baldur (1983) Formenneutralisation in den Flexionssystemen deutscher Dialekte. In: Besch et al. (Hrsg.). 1170–1173.
- Paul, Hermann (1968 (1920)) *Deutsche Grammatik. Bd. IV*. Tübingen: Niemeyer.
- Paul, Hermann (2002<sup>10</sup>) *Deutsches Wörterbuch*. Tübingen: Niemeyer.
- Petersen, Hjalmar P. (2016) The Spread of the Phrasal Clitic *sa* in Faroese. *Arkiv för nordisk*

- filologi*. 131. 105–128.
- Petersen, Hjalmar P./Adams, Jonathan (2009<sup>2</sup>) *Faroese — A Language Course for Beginners. Grammar*. Tórshavn: Stíðin.
- Petersen, Hjalmar P./Szczepaniak, Renata (2018) The Development of Non-paradigmatic Linking Element in Faroese and the Decline of the Genitive Case. In: Ackermann et al. (eds.) 115–145.
- Pfeifer, Wolfgang (Hrsg.) (2003<sup>3</sup>). *Etymologisches Wörterbuch des Deutschen*. München: Deutscher Taschenbuch Verlag.
- Philippi, Julia (1997) The Rise of the Article in the Germanic Languages. In: Van Kemenade/Nigel (eds.) 62–93.
- Ponelis, F. A. (1979) *Afrikaanse sintaksis*. Pretoria: Van Schaik.
- 相良守峯 (1965) 『ドイツ語学概論』 博友社.
- Schanen, François/Zimmer, Jaqui (2012) *1, 2, 3 Lëtzebuergesch Grammaire luxembourgeoise*. Esch-sur-Alzette: Editions Schortgen.
- Schirmunski, V. M. (2010 (1962)). *Deutsche Mundartkunde*. (übers. von Wolfgang Fleischer) Frankfurt a. M. et al.: Lang.
- 清水 誠 (2006) 『西フリジア語文法—現代北海ゲルマン語の体系的構造記述』 北海道大学出版会.
- 清水 誠 (2018) 「ゲルマン語形容詞変化の歴史的発達 (1) —ゴート語, ドイツ語, 北ゲルマン語」 『北海道大学文学研究科紀要』 155 号. 1–54.
- 清水 誠 (2019a) 「ゲルマン語形容詞変化の歴史的発達 (2) —西ゲルマン語 (1)」 『北海道大学文学研究科紀要』 156 号. 1–35.
- 清水 誠 (2019b) 「ドイツ語から見たゲルマン語一名詞の性, 格の階層と文法関係」 『北海道大学文学研究院紀要』 158 号. 37–76.
- 清水 誠 (2019c) 「ゲルマン語形容詞変化の歴史的発達 (3) —西ゲルマン語 (2)」 『北海道大学文学研究院紀要』 159 号. 45–80.
- Schmid, Hans Ulrich (2010) Ist der Dativ wirklich dem Genitiv sein Tod? In: Schmid. *Die 101 wichtigsten Fragen. Deutsche Sprache*. München: Beck. 99–101.
- Streitberg, Wilhelm (1920<sup>5/6</sup>) *Gotisches Elementarbuch*. Heidelberg: Winter.
- Thráinsson, Höskuldur/Petersen, Hjalmar P. /Í Lon Jacobsen, Jógvan/Svavo Hansen, Zakaris (2004) *Faroese. An Overview and Reference Grammar*. Tórshavn: Føroya Fróðskaparfelag.
- Torp, Arne (1992) Der sogenannte *Garpegenitiv* — Ursprung, Alter und Verbreitung im heutigen Norwegisch. In: Elmevik, Lennart/Schöndorf, Kurt Erich (Hrsg.). *Niederdeutsch in Skandinavien III. Beihefte zur Zeitschrift für deutsche Philologie* 6. 151–166.
- Van Gelderen, Elly (2011) *The Linguistic Cycle — Language Change and the Language*

- Faculty*. Oxford/New York: Oxford University Press.
- Van Haeringen, C. B. (1962<sup>2</sup>) *Neerlandica — Verspreide opstellen door C. B. Van Haeringen*. Den Haag: Daamen N. V.
- Van Haeringen, C. B. (1962<sup>2</sup> (1947a)) De meervoudsvorming in het Nederlands. In: Van Haeringen. 186-209.
- Van Haeringen, C. B. (1962<sup>2</sup> (1947b)) Naamvallen bij eigennamen van personen en bij verwantschapsnamen. In: Van Haeringen. 209-222.
- Van Kemenade, Ans/Vincent, Nigel (eds.) (1997) *Parameters of Morphosyntactic Change*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Vinje, Finn-Erik (1987<sup>4</sup>) *Moderne norsk*. Oslo/Bergen/Stavanger/Tromsø. Universitetsforlaget.
- Weerman, Fred/De Wit, Petra (1998) De ondergang van de genitief. *Nederlandse taalkunde* 3. 18-46.
- Weerman, Fred/De Wit, Petra (1999) The Decline of the Genitive in Dutch. *Linguistics* 37-6. 1155-1192.
- Wegener, Heide (1991) Der Dativ — Ein struktureller Kasus? In: Fanselow/Felix (Hrsg.) 70-103.
- 安井 稔 (1996<sup>2</sup>) 『英文法総覧—改訂版』 開拓社.